

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR (企業の社会的責任)

CSR (企業の社会的責任)

ヤマハ発動機グループのCSRに対する取り組みについてご紹介します。

企業情報・CSR情報:

- ▶ 企業概要
- ▶ 企業理念
- ▶ 役員一覧
- ▶ 事業紹介
- ▶ ヤマハ発動機のモノ創り
- ▶ 沿革
- ▶ CSR (企業の社会的責任)
- ▶ IR情報
- ▶ 採用情報
- ▶ レース活動
- ▶ スポーツ活動
- ▶ コミュニケーションプラザ
- ▶ グループ企業
- ▶ 本社及び周辺案内図

ヤマハ発動機グループのCSR

持続可能な 発展をめざして



Sustainability

● トップメッセージ

「モノ創りで輝き・存在感を
発揮し続ける企業」
として持続可能な社会の
発展に貢献するために



● お知らせ

» [一覧へ](#)

- 2011.7.4 CSRレポート2011を開示
- 2010.11.22 [グリーン調達ガイドライン \(改訂版\) を公開](#)

[東日本大震災に関わる弊社からのご連絡](#)

CSRの考え方とCSR基本方針

[詳しく →](#)

CSRレポート2011

(2010年1月～12月の活動報告と関連情報)

2010年活動クローズアップ



» [新たなモビリティの
追求](#)



» [人材の育成](#)



» [安全運転普及活動](#)



» [マリン事業50年の
歩み](#)

お客さま

- » [お客さまとともに](#)
- » [製品開発とモノ創り](#)
- » [お客さま対応/サービス](#)
- » [安全運転普及活動](#)
- [リコール関連情報はこちらをご覧ください](#)

コーポレート・ガバナンス

- » [リスクマネジメント/コンプライアンス](#)
- » [倫理行動規範 \(PDF\)](#)
- [コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、IR情報のページをご覧ください](#)

従業員

- » [従業員とともに](#)
- » [人材育成/キャリア支援](#)
- » [多様性を活かした職場づくり](#)

株主・投資家

- » [株主・投資家の皆さまとともに](#)
- [配当方針やディスクロージャーポリシーなどの情報はこちら](#)

- ※ 仕事と生活の両立支援
- ※ 職場の安全衛生

取引先

- ※ 取引先の皆さまとともに
- 取引先とのパートナーシップについて

地域・社会

- ※ 地域社会とともに
- ※ 社会貢献活動の事例
- ※ 従業員によるボランティア活動の事例

地球環境

- ※ 地球環境とともに
- ※ 2010年の計画と実績（一覧）
- ※ 環境マネジメント
- ※ CO2 排出量削減の取り組み
- ※ 環境負荷物質削減の取り組み
- ※ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ※ 生物多様性保全の取り組み
- ※ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ※ グループや各工場の環境データ

環境関連情報

- ※ グリーン調達ガイドライン、二輪車「3R」設計、リサイクルシステムなどはこちら



- CSR情報の開示について
- GRIガイドライン対照表
- 発行物ダウンロード
- アンケート
CSRレポート2011についてのアンケート

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団



バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR 情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

トップメッセージ

CSR レポート2011の情報開示にあたっての経営トップからのメッセージです。

CSR (企業の社会的責任) :

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR 関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSR の考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR 情報の開示について](#)
- ▶ [GRI ガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSR レポート2011についてのアンケート](#)

トップメッセージ

Top Message

「モノ創りで輝き・存在感を 発揮し続ける企業」として 持続可能な社会の発展に 貢献するために



この度、東日本大震災により、被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。当社と致しましても、早期復興のお役に立てるよう、出来る限りの支援活動を継続してまいります。また、震災を発端とした電力供給の問題に対し、以前から節電・省エネに取り組んでおりましたが、一般社団法人日本自動車工業会が決定した「夏季の電力需給ギャップ対策としての休日の振替実施」の方針に賛同し協力することといたしました。さて、今年もCSR レポートを発行する運びとなりました。CSR (企業の社会的責任) を取巻く社会の潮流を見ても、2010年には「ISO26000 (社会的責任に関する国際規格)」が発行されるなど、これまで以上に企業の社会的役割がグローバルに注目されてまいります。当社としてもそうした期待に応えるべく、グループ一丸となってさらに推進してまいります。

事業活動を通じて社会的責任に取り組むために

当社は、2010年新経営体制における経営の考え方・方向性の一つとして「会社をシンプルに分かりやすく」を念頭に、経営理念・方針の体系化と内容補強の改訂を進めました。その過程で、経営理念に記されている“社会的責任を果たす企業”を実現するため、これまでCSR の考え方としていた「ステークホルダーに対する取り組み姿勢」を「CSR 基本方針」として改めて制定し、趣旨・目的が重複していた他の方針類をこれに集約することでCSR に関連する方針の整理を行いました。そして、この「CSR 基本方針」を「内部統制基本方針」と並ぶ当社の基本方針の最上位とし、ヤマハ発動機グループが事業活動を遂行するうえでの拠り所として明確に位置づけました。同時に、当社のCSR の基盤づくりを担った「CSR 企画推進部」はその役割を全うし、今後は全ての事業に幅広くかかわる経営企画部門が着実にスピード感をもってCSR を推進する体制としました。以上のような方針の制定と推進体制の変更により、当社のCSR の考え方を全社員が共有し、社員一人ひとりが自らの業務のなかでCSR を実践できる環境とすることで、事業活動を通じた社会的責任の遂行にこれまで以上に取り組むことができると考えております。これからも当社は「モノ創りで輝き・存在感を発揮し続ける企業」として、世界各国地域で事業を展開するうえでの社会的責任を認識し、持続可能な社会の発展に貢献してまいります。

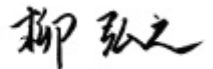
CSRレポート2011の発行にあたって

2010年は、2012年に向けた中期経営計画に沿って、経営基盤再建を着実に進捗させることができた1年となりました。本レポートでは2010年のさまざまな取り組みのうち、中期経営計画の成長戦略とヤマハ発動機グループのCSRに対する考えが合致している事例として、電動二輪車の普及活動を通じた「新たなモビリティの追求」、各国グループ企業と連携した「人材育成」、新興国市場での「安全運転普及活動」、各国地域社会と環境に配慮し継続してきた「マリン事業50年の歩み」を特集しています。

本レポートを通して、ステークホルダーの皆さまとのより良い信頼関係を築いていけることを願うとともに、本レポートに対する忌憚のないご意見をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

2011年6月

ヤマハ発動機株式会社
代表取締役社長 社長執行役員



[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [2010年活動クローズアップ](#)

2010年活動クローズアップ

2010年のCSR活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)



Close up 1
新たなモビリティの追求

「スマートパワー」の普及で取り組む
持続可能なモビリティ社会

Close up 1
新たなモビリティの
追求

Close up 2
人材の育成

Close up 3
安全運転普及活動

Close up 4
マリン事業50年の
歩み

ライフスタイルの変化に対応し 次世代の都市づくりにも繋がるスマートパワー

私たちの社会や暮らしの基盤には人や物の移動があり、その発展とともに交通手段は多様化していきます。資源やエネルギー利用の効率化、地球温暖化対策や環境保全といったグローバルな課題だけでなく、都市部における交通渋滞や中心部の空洞化といったローカルな問題解決においても、パーソナルモビリティが果たしうる役割は大きいという認識のもと、ヤマハ発動機は低炭素型のモビリティ社会の実現に役立つスマートパワーの普及に取り組んでいます。

スマートパワー（電動車両を基軸とする新しいモビリティを追求した新動力源）を用いた製品には電動アシスト自転車と電動二輪車があり、どちらも短距離移動に適した性能と扱いやすさを備えた、走行中にCO2を排出しないパーソナル通勤用です。エネルギー効率といった面からも環境への負荷軽減につながることに加え、今後の都市づくりへの貢献や新たなライフスタイルをもたらす可能性に対しても期待は高まっています。



コンパクトシティ構想にもとづいた都市部での移動における電動二輪車の使用イメージ



通勤やレジャーに使用する男性ユーザーに人気の電動アシスト自転車「PAS Brace-L（パズブレイスエル）」

スマートパワー製品の普及拡大を通じて 持続可能なモビリティ社会をめざす

今後のモビリティ社会において重要な役割を担うことが期待されている電動二輪車については、2010年秋に高エネルギー密度のリチウムイオンバッテリーと車載充電器によるプラグイン充電方式を採用した「EC-03（イーシーゼロスリー）」を日本国内で発売しています。

都市部における短距離移動に最適化した製品コンセプトは、近年、日本や欧州で議論されているコンパクトシティ構想（都市機能を集中させた街づくり）への輸送機器メーカーとしての提案であり、ヤマハ発動機グループでは各地で「スマートパワー試乗会」を開催するなど、2020年代と予測されているEV（電動車両）の本格的な普及に向けた取り組みを始めています。また、EC-03は台湾や欧州市場での要件も踏まえて開発されており、2011年の導入を予定しています。



2010年秋に日本国内で発売した電動二輪車
「EC-03」は家庭や外出先での充電が可能なプラグイン方式を採用

自治体による次世代のモビリティ実証実験への協力

日本の各地では自治体、環境省、国土交通省による次世代のモビリティ社会実現を 目指した電動二輪車を使った実証実験が行われています。

主な事例としては、神奈川県「かながわEVバイク普及推進プロジェクト」、環境省が行うモデル事業の一つ「箱根EVタウンプロジェクト」、静岡県浜松市の地域産学官による「はままつ次世代環境車社会実験協議会」、第一種原動機付自転車（原付一種）の保有台数が最も多い大阪府での「事業用EVバイク普及モニタープロジェクト」、国土交通省が群馬県桐生市で推進する「超小型モビリティ実証実験」などがあり、ヤマハ発動機グループでは、EC-03やプロジェクト専用開発した電動二輪車（モニター車両）の提供や試乗会の企画運営など、さまざまな協力を行っています。

こうした取り組みでユーザーから得られるさまざまな知見、実際の使用状況であるからこそ浮き彫りになる電動二輪車の可能性や洗い出されてくる課題は、今後の製品開発やお客さまへのサービス提供に反映されることになっています。



「はままつ次世代環境車社会実験協議会」で市役所や企業、大学、産業支援機関等による実証実験に使われる「EC-03」

協力した事例についての詳細はこちら

<http://www.yamaha-motor.jp/ev/action/>

（製品ページに移動します）

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) 2008 Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved.

ホーム > 企業情報・CSR 情報 > CSR (企業の社会的責任) > 2010年活動クローズアップ

2010年活動クローズアップ

2010年のCSR 活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR (企業の社会的責任) :

- ▶ トップメッセージ
- ▶ CSR 関連のお知らせ
- ▶ 2010年活動クローズアップ
- ▶ CSR の考え方
- ▶ コーポレート・ガバナンス
- ▶ お客さま
- ▶ 株主・投資家
- ▶ 従業員
- ▶ 取引先
- ▶ 地域・社会
- ▶ 地球環境
- ▶ CSR 情報の開示について
- ▶ GRI ガイドライン対照表
- ▶ 発行物ダウンロード

関連リンク:

- ▶ CSR リポート2011についてのアンケート

Close up 2 人材の育成

モノ創りの進化を持続させる グローバルな人材育成

Close up 1
新たなモビリティの
追求

Close up 2
人材の育成

Close up 3
安全運転普及活動

Close up 4
マリン事業50年の
歩み

ローカルな事情を踏まえたグローバルなモノ創り

ヤマハ発動機グループは30ヶ国に140のグループ会社をもち、200を超える国と地域で二輪車や船外機などの販売とサービス提供を展開しています。売上高ベースでは海外市場が約9割となっており、人々の生活に欠かせない、交通・輸送インフラの役割を担っている製品も少なくありません。そうした社会や人びとの生活に深く根ざしている製品では、現地のさまざまな事情を把握したうえで、要望を満たし、期待に応えるモノ創りが求められています。

出荷台数の約8割がアジア地域で使用されている二輪車を例にとると、2010年の出荷台数は600万台を超えています。国や地域によってさまざまな性能、仕様、装備、ユーザーの嗜好、価格設定など、違いや配慮すべき項目があります。製品の企画開発の拠点は日本に置けていますが、市販に向けた詳細確定のプロセスにおいては、実際に製造・組み立てや販売をおこなう現場を熟知した人材からのさまざまなインプットなくして判断は成り立たないといっても過言ではありません。



2010年ヤマハ発動機グループの二輪車出荷内訳



2010年に発売された「Mio Soul (ミオソウル)」はタイ・インドネシア・マレーシア・ベトナムの4ヶ国で主力製品となっている「Mio (ミオ)」のシリーズモデル

インドネシアと日本を拠点にした モノ創りのグローバル化

経済発展著しい東南アジアにおいて主要な二輪車市場となっているインドネシアは、ヤマハ発動機グループのモノ創りのグローバル化における拠点としても位置付けられ、年間生産台数400万台を目標とした生産能力の増強を進めております。

2008年11月に開所した「グローバルトレーニングセンター」は、インドネシア国内だけでなくタイやベトナムなどの周辺国からも研修生を受け入れて、モノ創りのための知見や技術習得を目的とした世界共通プログラムによる人材教育をおこなっております。

制度面ではグループ会社のヤマハモーターアシストが2008年から運用を開始している「国際人材育成プログラム」があり、50年以上にわたって培われてきた当社のモノ創りにおける有形無形の資産を、国籍や年齢、育った文化などを超えて次の世代へと継承していくための人材育成にも取り組んでいます。2010年には、エンジン設計をはじめ多岐にわたる開発プロセス全般に携わることでプロジェクトリーダーの要職をめざすエンジニアや、製品によっては3千点以上に上ることもある二輪車の部品を国内外に拡がるサプライヤーと取引することから生産の基盤ともいえる調達部門において品質管理を学ぶインドネシア人スタッフが、ヤマハのモノ創りを自国で担うための研修生として本社での業務に従事しました。

なお、2011年2月時点では9つの国と地域の現地グループ会社で採用された計66名の研修生が日本に滞在し、ヤマハ発動機本社の開発・製造・サービス・営業などの各部門で実務研修に取り組んでいます。



ヤマハのモノ創りを担う人材育成のためにインドネシアで運営されているグローバルトレーニングセンターの研修の様子



調達部門で学ぶインドネシア人研修生のジョコ・ブルワント（左）とコハル・マクフディン（右）

グローバルなビジネス展開を各地で担う 日本人スタッフの育成

ヤマハ発動機では海外現地に赴くことでグローバルな事業活動に携わることを希望する日本人社員のために、さまざまな成長機会を提供する制度の充実にも取り組んでいます。まず、基本となる語学やビジネススキルを学ぶ「自己啓発講座」、海外の大学などに留学して最先端の理論や知識・技術を習得する「海外留学奨学金制度」があり、グローバルな視点と自律マインドの醸成をはかるとともに海外勤務への適性を見極めることを目的とする「海外研修制度」では、海外のグループ会社において1年間の実務を経験することができま

す。また、通常の人事異動とは別に、担当業務を問わず国内外での新たな取り組みやプロジェクトで必要とされる人材を公募する「セルフ・バリュー・チャレンジ制度」を利用して海外に飛び立つ社員もおり、海外赴任の前には異なる文化や社会環境への理解促進などを中心とした「赴任前研修」も

実施するなど、ヤマハ発動機グループのグローバルなモノ創りを基盤としたビジネスを担う人材育成に取り組んでいます。



海外研修制度でシンガポールに駐在し、アセアン域内の物流業務に従事した岡田理恵子（2006年入社・日本では三国間貿易を担当）

[◀ Closeup 1 「新たなモビリティの追求」](#)

[Closeup 3 「安全運転普及活動」へ ▶](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

[ホーム](#) > [企業情報・CSR 情報](#) > [CSR \(企業の社会的責任\)](#) > [2010年活動クローズアップ](#)

2010年活動クローズアップ

2010年のCSR 活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR (企業の社会的責任) :

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR 関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSR の考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR 情報の開示について](#)
- ▶ [GRI ガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSR リポート2011についてのアンケート](#)



モビリティ社会の持続と発展に不可欠な“安全”

ヤマハ発動機グループの製品の多くは、人々の移動を支え、物の輸送などに活躍する乗り物です。人や物が動くことは社会が発展するための基盤であり、その持続性を保つためには“安全”が欠かせないことは言うまでもありません。モビリティ社会によって生活が豊かになっていくのと同時に、交通事故をいかに未然に防ぐか、という課題への取り組みも必要になってくるのです。

安全なモビリティ社会は、人、乗り物、交通環境の3つの要素によって成り立つものです。ヤマハ発動機グループは、輸送機器メーカーとして当然の取り組みである製品の安全性追求に加え、製品の正しい使用方法や交通環境がもたらす事故のリスク、事故を避けるために役立つ知識をより多くの人に持っていただくための活動にも取り組むことで、モビリティ社会の発展と持続に貢献しています。



正しい乗車姿勢と服装の重要性についてや、酩酊状態の視覚を再現するゴーグルを用いた飲酒運転の危険性についての講習（インドにて）

地域の実情を踏まえて グローバルに展開

ヤマハ発動機グループでは、世界各地でさまざまな形態・分野における安全運転普及活動に取り組んでいます。代表的なものとしては「ヤマハライディングアカデミー

(YRA)」における取り組みがあります。安全運転普及活動における運転操作技術指導は最も重要な要素であり、各地で実施するインストラクター養成講習に加え、警察などの公的機関を対象にしたスキルアップ講習、安全を科学的視点で捉えた独自の教育プログラム

「ヤマハ・セーフ・ライディング・サイエンス

(YSRS)」を使って、学校などで実施する教育活動、児童を対象にした年齢・段階別の安全教育教材の提供、販売店に対する啓発活動など、YRAの一環としてヤマハ発動機が各国のグループ会社とともに取り組んでいる安全運転普及活動は多岐にわたっています。

主な対象は、他の乗り物との混合交通や歩行者も多い市街地などで使われることが多い二輪車ですが、地域やユーザーの実情に応じてATV（四輪バギー）やウォータービークル（水上オートバイ）、スノーモビルなどでも実施しています。活動の重点は、急速にモビリティの普及が進んで安全運転についての啓発や意識向上が社会の重要課題となっている新興国（アセアン、中南米、中東、ロシア、アフリカなど）にあります。ヤマハ発動機と各国のグループ会社の連携のもとで、地域実情を踏まえた安全運転普及活動にグローバルに取り組んでおり、2010年のYRA活動実績*は延べ558回・受講者25,289名、資格認定されたインストラクターが663名となっています。

*集計対象は二輪車・ATV・スノーモビル



実験映像などを見ながらディスカッションも行ない、各自に気付きを促す安全運転教育プログラム YSRS



ウォータービークル（水上オートバイ）のYRAインストラクター養成講習は中南米諸国やUAE、クウェート、インドネシアなど、10ヶ国以上で実施されている

世界第二位の二輪車市場となった インドにおける取り組み

経済成長とモビリティの発展が急速に進むインドでは、道路事情などの影響もあって二輪車に対する需要が高く、中国に次ぐ世界第二位の市場となっています。現地グループ会社IYMでは行政や教育機関と連携しながら、運転操作技術指導はもとより、YSRSを用いた二輪車の安全運転普及活動を積極的に展開しており、事故を未然に防ぐための知識の習得、トレーニングコースを設置して行う実技講習を通じて、適切な使用方法を実践することの必要性、安全な交通社会の実現に対する有効性への理解浸透に努めています。二輪車の楽しさや正しい運転マナーについても実体験を通して知ってもらおうYRAプログラムの2010年の実施は67都市（17州）で延べ35日間、受講者は計1,879名となっています。



二輪車もつ運動特性と正しい操作方法を実際に運転することで体感するための実技講習

ヤマハ発動機（日本）からは、二輪車が走行する際の運動エネルギーや停止メカニズムなどを実験映像やアニメーションを活用して解説し、運転者の状況把握と運転操作の仕組み、錯覚や思い込みによるリスク、的確な判断のための予備知識や危険予知の重要性などを科学的に理解してもらうための教材と実技講習も含む運営ノウハウを提供、また、今後の活動を担うインストラクター養成講習などのサポートをしています。



ミニバイクを使って児童を対象にしたYRAも実施している

IYM：India Yamaha Motor Pvt. Ltd.

[◀ Closeup 2 「人材の育成」へ](#)

[Closeup 4 「マリン事業50年の歩み」へ ▶](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR \(企業の社会的責任\)](#) > [2010年活動クローズアップ](#)

2010年活動クローズアップ

2010年のCSR 活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR (企業の社会的責任) :

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR 関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSR の考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR 情報の開示について](#)
- ▶ [GRI ガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSR リポート2011についてのアンケート](#)



“豊かな生活を提供すること” その志が原点

ヤマハ発動機の最初の製品となった二輪車の発売から5年後の1960年、当時注目の新素材FRPを採用したモーターボート「RUN13」と「CAT-21」を発売、そのわずか二ヵ月後には二輪車の小型エンジン技術を応用した船外機「P-7」を発売して始まったヤマハ発動機グループのマリン事業の歴史は2010年をもって半世紀を超えました。漁業や物の輸送といった仕事や人々の日々の移動に欠かせない手段として、あるいは社会の成熟とともに人々が楽しむようになるさまざまなマリレジャーを支える道具として、ヤマハ発動機のマリン製品が活躍する国と地域は、現在では180以上を数えるようになってきました。日本経済の高度成長やビジネスの海外展開とともに、ヤマハ発動機グループのマリン事業はレジャー用ボートや漁船などの舟艇や、ウォータビークル（水上オートバイ）などへとその製品分野を拡げてきましたが、ヤマハのマリン事業の最大の特徴は、水上スキーやボート免許の教室、ヨットスクールの開催、安全意識やマナーの向



ヤマハ発動機本社のコミュニケーションプラザに展示されている歴代の船外機（手前が第一号製品であるP-7）



1979年にはじめて開催されたたジュニアヨットスクール（日本）は、現在も継続して行われている

上、マリーナなどの遊びの環境づくり、ボートやヨットの国際的なレースへの挑戦といった普及活動にも同時に取り組んできたことにあります。そして、それらの事業活動すべての原点には、創業時から受け継がれ、現在の企業目的のなかにも流れている“豊かな生活を提供する”という志があるのです。

“現地密着”のモノ創りとサービス提供 事業を通じた社会貢献

2010年3月に累計生産台数が900万台を超えた船外機は、途上国や過酷な使用状況での耐久性やメンテナンス性を重視したことから、先進国市場を中心にレジャー目的で使用される、環境対応や低燃費にも配慮した高出力モデル、そして日本の沿岸漁業などで用いられる電動モデルに至るまで、さまざまな用途と現地の状況に対応した製品ラインアップとなっています。

2010年出荷数では世界の総需要の約40%（当社調べ）を占めており、そうした高評価の背景には、地域によって異なる暮らし、人々の考え方、文化習慣、実際の使用環境に対する理解を担当者が現地を訪れることによって深め、地道なトライ&エラーを蓄積していくモノ創り、販売後のメンテナンスや修理・パーツ供給体制の充実に地域を問わず常に努めてきたことがあると考えています。

そうした“現地密着”が特徴となっているヤマハ発動機グループのマリン事業がもつ社会貢献の側面を象徴する事例としては、発展途上国における沿岸漁業支援があります。木造船と人力による伝統的な漁業をおこなっていた地域にFRP製の漁船や船外機などの動力を用いることを提案するだけでなく、日本のさまざまなノウハウをもとに、安全で効率のいい魚の捕り方、船上での鮮度保存、流通のための加工や店頭での販売、料理法にいたるまでをイラストや写真で紹介する情報誌を発行するなど、製造業の枠を超え、現地の産業振興に寄与する活動にも半世紀を超えて取り組んできています。



船外機が実際に使われている漁村などを営業・サービス・技術担当が巡回して実施するメンテナンスなどのサービス活動（1972年スリランカで撮影）



1977年に英語で発行され、他言語にも翻訳された「フィッシャリー・ジャーナル」（左）は、現在に至るまで途上国の漁業関係者からの支持を受け、国際機関や各国の大学をはじめ、大英図書館にも収蔵されている

人々の暮らし、持続可能な社会に 今後も役立つモノ創り

船外機などのマリンエンジンをはじめとするマリン製品の分野においても、環境負荷の低減によって持続可能な社会実現に重要な役割を果たすことが求められています。ヤマハ発動機グループの直近の取り組みとしては、2015年までに2007年比で30%の燃費向上を目標とした次世代環境対応エンジン（船外機）の開発があります。小型エンジ

ン技術とともにヤマハ発動機のコア技術となっているFRP（ガラス繊維強化プラスチック）素材の加工製造技術においても、環境負荷を低減する開発設計や製造技術の導入に引き続き取り組んでいます。

持続可能な社会には、資源、エネルギー、環境負荷の低減といった地球環境の視点での取り組みが不可欠ですが、人々の暮らしが豊かになるために、より多くの地域で社会環境の改善や経済の発展に役立つ製品やサービスの提供、改善について取り組むこともまた、企業の社会的責任を果たすことにつながるとヤマハ発動機グループでは考えています。



船外機の生産が行われている袋井南工場では、最新の生産技術を採用した品質向上とともに自然採光や水循環システムなどの環境負荷低減にも取り組んでいる



より多くの人にマリレジャーの楽しさに触れてもらうための会員制マリクラブ「ヤマハシースタイル」の会員数は14000名を超えている
(2010年時点)

2010年公開の50周年記念スペシャルコンテンツ「マリ事業50年の歩み」はこちら
<http://www.yamaha-motor.jp/marine/history/>
(該当サイトに移動します)

[◀ Closeup 3 「安全運転普及活動」へ](#)

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

CSRの考え方

ヤマハ発動機グループのCSRについての考え方やその基となる理念体系についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

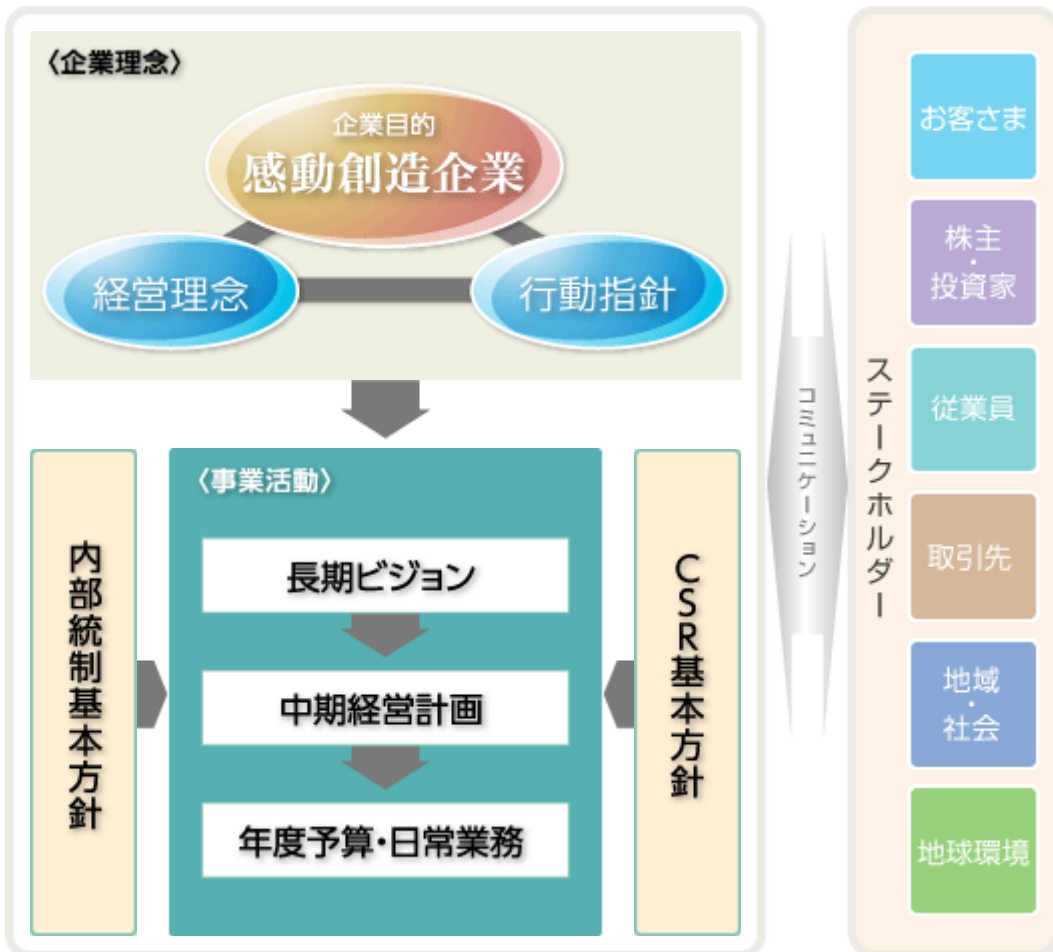
- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

CSRの考え方

事業活動を通じて
社会の持続可能な発展に貢献します。

ヤマハ発動機では創業以来、「社訓」に“企業活動を通じた国家社会への貢献”を謳い、この精神に基づいた従業員一人ひとりの行動を通して社会に貢献することを掲げています。そして、「感動創造企業：世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する」ことを企業目的として、「モノ創り」を通じて多様な価値の創造に努めてきました。また、経営理念においては「顧客の期待を超える価値の創造」、「仕事をする自分に誇りが持てる企業風土の実現」、「社会的責任のグローバルな遂行」というお客さま・従業員・社会に対する経営の基本姿勢を示しており、企業目的と経営理念、さらに実践における行動指針の3点をもってヤマハ発動機グループの企業理念としています。

ヤマハ発動機グループでは、ステークホルダーへの主な社会的責任をCSR基本方針としてまとめており、企業理念に基づく事業活動を通じて社会の持続可能な発展に貢献することが、私たちに期待されているCSR（企業の社会的責任）と考えています。



[CSR の考え方 →](#)

[CSR 基本方針 →](#)

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) 2008 Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved.

CSR基本方針

ヤマハ発動機グループのCSRに関する基本方針をご紹介します。

CSRの考え方:

▶ [CSR基本方針](#)

CSRの考え方

CSR基本方針

ヤマハ発動機グループは、社会からより信頼される企業として、国内外の法令ならびにその精神を遵守するとともに、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを大切に、企業理念に基づく事業活動を通じて、社会の持続可能な発展に貢献します。取引先においても、この方針の趣旨を支持し、それに基づいて行動することを期待します。

<p>お客さま</p>	<ul style="list-style-type: none"> 安全で高品質かつ革新的な製品とサービスを通じて、世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供します。 製品に関する有益な情報を分かりやすく提供します。 お客さまをはじめ事業活動にかかわる人々の個人情報保護の徹底に努めます。
<p>株主・投資家</p>	<ul style="list-style-type: none"> 長期安定的な成長を通じた企業価値の向上をめざします。 事業・財務状況と成果の適時かつ適正な開示を行います。
<p>従業員</p>	<ul style="list-style-type: none"> 均等な雇用機会を提供し、従業員の多様性を認め、差別を行いません。 公正な労働条件を提供し、安全かつ健康的な労働環境を維持・向上するよう努めます。 人権を尊重し、いかなる形であれ児童労働・強制労働は行いません。 従業員と会社が、相互信頼に基づき、誠実な対話と協議を行い、お互いに繁栄するよう努力します。
<p>取引先</p>	<ul style="list-style-type: none"> 調達先や販売店などの取引先を尊重し、相互信頼に基づき、長期的視野にたって相互繁栄の実現に取り組みます。 調達先の決定にあたっては、国籍や規模にかかわらず広く世界に門戸を開き、総合的な評価に基づき判断します。 各国・地域の競争法を遵守し、公正な取引を維持します。
<p>地域・社会</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各国の文化・慣習を尊重し、企業市民として社会との調和に努めます。 納税、雇用創出、モビリティ創出などを通じて、健全な地域社会の発展に貢献します。 人材育成、環境保全、交通安全普及など社会貢献活動を推進し、また従業員の自主的な活動を支援します。 行政府諸機関との健全かつ公正な関係を維持します。

地球環境

- 環境技術の開発を進め、環境と経済が両立した製品の実現をめざします。
- 限りある資源を大切に、事業活動による環境負荷の最小化に努めます。
- 幅広く社会と連携・協力し、環境保全活動に取り組みます。

[CSR の考え方](#) →

[CSR 基本方針](#) →

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR（企業の社会的責任） > コーポレート・ガバナンス

コーポレート・ガバナンス

ヤマハ発動機グループのコーポレート・ガバナンスについてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ トップメッセージ
- ▶ CSR関連のお知らせ
- ▶ 2010年活動クローズアップ
- ▶ CSRの考え方
- ▶ コーポレート・ガバナンス
- ▶ お客さま
- ▶ 株主・投資家
- ▶ 従業員
- ▶ 取引先
- ▶ 地域・社会
- ▶ 地球環境
- ▶ CSR情報の開示について
- ▶ GRIガイドライン対照表
- ▶ 発行物ダウンロード

関連リンク：

- ▶ CSRレポート2011についてのアンケート

コーポレート・ガバナンス

社会から信頼され 模範となることをめざして

ヤマハ発動機グループでは、コーポレート・ガバナンスの弛まぬ強化と維持に努めながら、社会からの信頼の基盤となるコンプライアンスとリスクマネジメントに関する取り組みをCSRにおける最優先課題として位置付けています。

統合的な推進および内部統制の視点からの強化を図るための体制づくりとしては、社長執行役員が委員長をつとめ、すべての役付執行役員および社外有識者で構成される「リスク・コンプライアンス委員会」を設置しています。リスク・コンプライアンス委員会は、リスクの洗い出しと評価に基づいて選定した重要リスクの担当部門を決定し、リスク発生の未然防止から発生後の対応までの取り組みに関わり、その推進状況をモニタリングするなど、ヤマハ発動機グループの抱えるリスクの統合的な管理を担っています。

[コーポレート・ガバナンス](#) →

[リスクマネジメント／コンプライアンス](#) →

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、[IR情報のページ](#)をご覧ください →

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

リスクマネジメント／コンプライアンス

リスク対応やコンプライアンスに関する取り組みをご紹介します。

コーポレート・ガバナンス:

▶ [リスクマネジメント／コンプライアンス](#)

コーポレート・ガバナンス

リスクマネジメント／コンプライアンス

リスクマネジメントの取り組み

ヤマハ発動機グループでは、グループ全体で統合的かつ適正なリスクマネジメントを行うための体制を構築し、確実な管理推進によって重要リスクの未然防止をはかっています。グループ共通の管理手法としては、リスクマネジメント規程と緊急時対応規程に基づいて、コンプライアンスに関わる不祥事、災害、事故などのリスクの未然防止と早期発見、さらに発現時の迅速・的確な対応に努めています。

2010年12月時点でヤマハ発動機を含むグループ会社109社でリスクマネジメントシステムの導入を終え、運用を行っています。

コンプライアンスの周知徹底

ヤマハ発動機グループでは、年度計画に基づいたコンプライアンス活動を継続的に展開しており、社会から信頼され模範となる企業をめざし、社訓や経営理念を踏まえて遵守すべき行動基準を定めた「倫理行動規範」の周知徹底をはかるとともに、役職員一人ひとりの業務における実践を促しています。



ヤマハ発動機の倫理行動規範

コンプライアンス研修

ヤマハ発動機と国内グループ会社では、倫理行動規範の徹底や業務に関連する法令の理解促進を目的に、役職員を対象とした教育・研修を、階層別、部門別に開催しています。

対象区分		延人数
倫理研修	役員、基幹職、監督職、一般職	1,501人
	内) 部門フィードバックミーティング	382人
法令研修	集合研修	5,606人
	eランニング	18,228人

2010年は本社部門長、国内子会社社長、管理責任者を対象に、リスク認識を合わせ再発防止・未然防止につなげるために、社員意識調査の結果及び身近な事例を題材とした「部門フィードバックミーティング」を開催しました。現場に出向き、小規模なミーティングを58回開催し、質疑応答ができる形式で、部門長等と課題を共有化しています。



内部通報制度（ホットライン）

ヤマハ発動機では、役職員が「倫理行動規範」に違反する行為に気付いた場合の通報や、コンプライアンス全般に関する相談・問合せを行えるように「コンプライアンスホットライン」と「ハラスメントホットライン」を設置しています。また、国内グループ会社を対象とした「コンプライアンスグループホットライン」も設置するなど、違法行為や不正行為の早期発見と未然防止に努めています。事前相談の割合が増加しており、未然防止の風土が醸成されつつあります。

安全保障貿易管理

ヤマハ発動機では、「外国為替及び外国貿易法」などの関連法規の遵守を基本とした、リスク管理の面でも実効性の高い安全保障貿易管理に取り組んでいます。関連部門で実施している勉強会では、事業部門やグループ会社の社員が認定試験の準備や自己啓発に取り組んでおり、2010年6月に実施された第17回安貿実務能力認定試験では、システックアソシエイト試験にヤマハ発動機から47名・国内グループ会社から8名が合格、システック認定エキスパート試験ではヤマハ発動機から4名の合格者がでています。



システックアソシエイト試験の合格者

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR（企業の社会的責任） > お客さま

お客さま

お客さまへの取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ トップメッセージ
- ▶ CSR関連のお知らせ
- ▶ 2010年活動クローズアップ
- ▶ CSRの考え方
- ▶ コーポレート・ガバナンス
- ▶ お客さま
- ▶ 株主・投資家
- ▶ 従業員
- ▶ 取引先
- ▶ 地域・社会
- ▶ 地球環境
- ▶ CSR情報の開示について
- ▶ GRIガイドライン対照表
- ▶ 発行物ダウンロード

関連リンク：

- ▶ CSRレポート2011についてのアンケート

お客さま

お客さまの感動、豊かな生活のために期待を超える価値を提供

企業目的である「世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する」の実現にあたっては、何よりもまず「製品」が果たす役割が大きいとヤマハ発動機グループでは考えています。お客さまとの関係の基盤には確かな品質があったうえで、製品開発やモノ創り、サービスの向上を通じて、変化する社会の要請に応え、期待を超える価値を提供することがお客さまの感動や豊かさの体験へとつながっていくと私たちは考えています。ヤマハ発動機グループの製品の多くはモビリティ（＝人やモノの移動）に関わるものです。趣味やレジャー目的から、通勤・通学や荷物の運搬といった生活に欠かせない道具としての領域まで、お客さまの用途は多岐にわたり、国や地域によって求められる対応も異なっていますが、いずれにしても「お客さま基点での判断」が最優先されることに違いはありません。そうした判断においては、販売店やお客さま相談室などを通じて届けられる、お客さまからの評価や要望が不可欠かつ貴重な情報源となっています。私たちはそれらを最大限に活用し、製品の企画段階からサービスに至るまで、「お客さま基点」での検証・改善による提供価値の向上に取り組んでいます。

お客さまとともに →

製品開発とモノ創り →

お客さま対応／サービス →

安全運転普及活動 →

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

製品開発とモノ創り

2010年の製品開発や生産における取り組みをご紹介します。

お客さま:

- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

お客さま

製品開発とモノ創り

プラグイン充電方式を採用した電動二輪車を日本で発売

走行時のCO2排出がゼロとなり、化石燃料への依存も軽減できることから、電動車両の本格的な普及をめざした取り組みがグローバルレベルで始まっています。ヤマハ発動機は2010年9月に充電式バッテリーとモーターで走行するエレクトリック・コミューター「EC-03」を首都圏で発売しています（全国発売は10月）。

ヤマハ発動機では電動二輪車初の量産モデルとなった「Passol（パッソル）」を2002年に発売しており、普及が急速に進んでいる電動アシスト自転車とともに、都市部での次世代交通インフラの一翼を担うミニマムコミューターの普及に取り組んできています。住居や外出先での充電インフラ、日本国内や各国の制度・規制をはじめとする、社会全体のさまざまな環境整備の進捗を考慮しながら、今後も中長期でのモビリティのあるべき姿を見据えた取り組みをグローバルに進めていきます。



2011年には欧州などで発売されるEC-03（イーシーゼロスリー）

電動アシスト自転車PASのラインアップ充実

電動アシスト自転車の便利さが認知され、健康志向や環境意識の高まりもあって、従来の子供をもつ主婦層やシニア層に加え、通学・通勤での使用や、官庁・自治体・企業による業務使用等へと需要が広がってきています。

ヤマハ発動機では2010年も電動アシスト自転車の製品ラインアップの充実に取り組み、業務用については男性ユーザーが多いことから、従来のU字フレームを採用した製品に加えて、スタaggerドフレームを採用した「PAS GEAR-S（パスギアエス）」を9月に発売しています。



業務での使いやすさに配慮して耐久性に優れた駆動系部品、大型フロントバスケット、リヤキャリアなどを標準装備したPAS GEAR-S（パスギアエス）

船外機が米国でイノベーションアワード受賞

ヤマハ発動機のバスボート専用4ストローク船外機「VF250」が、2010年9月に米国で開催された国際マリントレードショー「IBEX2010」において米国舟艇工業会のイノベーションアワードを受賞しました。受賞に際しては、「バスボートに必要な卓越したスピード性能を発揮する革新的な4ストロークエンジンとして、従来の2ストローク船外機と同等かそれ以上の軽量化を実現しつつ、4ストロークの強みである環境性・低燃費・静粛性を維持している」と評価されました。



「VF250」は米国向け輸出モデルで4ストローク船外機VMAX SHO（ブイマックス エスエッチオー）シリーズのトップモデル

詳しくはこちら（2010年10月の公式発表のページ）
<http://www.yamaha-motor.co.jp/news/2010/1014/vf250.html>

救護救命の現場を支えるゴルフカー

ヤマハモーターパワープロダクツでは、AED（自動体外式除細動機）、担架などの救護活動に必要な装備をもった「ヤマハゴルフカー アンビランスタイプ」を2010年3月に発売しています。ゴルフカーはゴルフ場以外に空港や工場、病院などでも人の移動や荷物の運搬に利用されているほか、特殊な装備を施すことで、野球場のリリーフカーやテーマパークの遊具などにも活用されていて、そうした事例の一つに救護目的のものもあったことが、今回の製品化の発端となっています。スポーツ施設やイベント会場でも普及が進むAEDは、一刻を争う救護活動においては重要な役割を担っており、機動性を持たせられることのメリットは少なくありません。2010年6月に南アフリカで開催されたサッカーワールドカップでも、現地のヤマハ発動機グループ製品の輸入販売代理店が、ゴルフカーをベースに製作した救護カーが各スタジアムに配備されました。ヤマハ発動機グループでは今後も社会的意義のある製品の提案、普及に取り組んでいきます。



AED（自動体外式除細動機）や担架などを装備した「ヤマハゴルフカーアンビランスタイプ」



2010 FIFAワールドカップ南アフリカ大会で各スタジアムに配備されていたゴルフカーに特殊装備を施した救護カー

日光市とともに研究実験が進む「介護予防型車両」

ヤマハ発動機では日光市のプロジェクトチームとともに、加齢にともなう機能低下が見られる高齢者の生活における移動をサポートすることを目的とした「介護予防型車両」の研究に2006年から取り組んでおり、2010年には日光市にある介護福祉施設で、ヤマハモーターエンジニアリングによる試作車を使った検証活動を進めました。

（2011年1月には型式認証を取得）

電動アシスト自転車の技術を活用した「らいふ・ウォーカー」はペダルに漕ぐ力が伝わるとバッテリー駆動のモーターからのアシストが加わること



2011年1月に時事通信社が主催（ヤマハ発動機は協賛）した自治体実務セミナーでの車両展示の様子

によって走行し、ペダルを停止もしくは足を離すと回生ブレーキが自動的にかかって最終的には駐車ブレーキが作動します（速度は電動車の法定速度時速6キロ未満に制御）。

実証実験では、年齢を重ね体力的に外出に不安を感じる方の移動手段や、半身に障害がある方のリハビリなどに活用できる可能性があることが分かってきています。ヤマハ発動機グループでは、モノ創りや制御技術などの資源を社会的な課題解決に活かす活動に今後も取り組んでいきます。

同品質のモノ創りを世界各地のお客さまに

モノ創りのグローバル化の進展とサプライチェーンの伸張にともなって、全世界の生産拠点における技術、技能レベルの標準化が重要課題となっています。ヤマハ発動機グループでは、これまで培ってきたモノ創りのための有形無形の資産を、海外拠点においても若い世代に継承していくことが、「ヤマハの品質」をこれからもお客さまに提供していくためには不可欠と考えています。

世界各地でのモノ創りにおける技術の標準化と必須とされる人材育成を目的として、インドネシアに開所した生産技術者教育施設「グローバルトレーニングセンター」は、2011年には運用3年目を迎えています。この施設には、大会議室や教室などの座学エリア、溶接・機械加工・組立・塗装・完成検査などの訓練を行う実技エリアなどを備えており、インドネシアでの新規採用者をはじめ、タイやベトナムといった周辺国からも研修生を受け入れて世界共通のカリキュラムに沿った教育を実施しており、モノ創りに欠かせない知見やスキルの向上に取り組んでいます。



[お客さまとともに](#) →

[製品開発とモノ創り](#) →

[お客さま対応／サービス](#) →

[安全運転普及活動](#) →

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

お客さま対応／サービス

お客さまへの対応やサービスについての取り組みをご紹介します。

お客さま:

- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

お客さま

お客さま対応／サービス

お客さまの声を活かした品質づくり

ヤマハ発動機では、お客さまからのご意見・ご要望は、製品やサービスへの期待の表れであり、一つひとつに対する誠実な対応がお客さまの満足を高め、信頼につながると考えています。お客さまの製品への評価や使用状況を知り、品質改良や将来の製品づくりに活かすために、販売店やグループ会社のサービス関連部署を通じて集められる情報とともに、お客様相談窓口寄せられた声を情報共有し、サービス対応の強化に取り組んでいます。例として日本のお客様相談窓口では、国内のお客さまからの問い合わせ・相談を日々受けるなかで、製品・サービスの改善の必要性もしくはその可能性があるかと判断された内容については、お客さまのご要望・ご意見と窓口の判断を関連部署に連絡し、また製品の改良やサービスの改善、Webサイトや販売店を通じたお知らせなどの実施を確認することで、対応の強化を行っています。

製品に関する問合せ先：<http://www.yamaha-motor.co.jp/faq/contact/>

リコール関連情報：<http://www.yamaha-motor.co.jp/recall/>

プライバシーポリシー：<http://www.yamaha-motor.co.jp/policy/>

イベントを通じたお客さまとのコミュニケーション

ヤマハ発動機グループは、モーターショー等の展示イベントもお客さまとのコミュニケーションを深める重要な機会の一つと捉えております。2010年3月に開催された東京モーターサイクルショーと大阪モーターサイクルショーでは、実車両を展示し、来場者とのコミュニケーションを通じて製品への期待や要望を知ることにも努めました。また、25周年を迎えたSEROW（セロー）については、長年のご愛顧への感謝も込めたイベントを7月に主催、約400名のオーナーを含む700名以上のお客さまとの交流を深めることができました。



3日間で92,304人が来場した東京モーターサイクルショー



多くの愛好者と家族が訪れたSEROW250の発売25周年を記念したイベント

アマゾンの子どもたちの通学を支える船外機

BRICsの一員として経済成長を続けているブラジルでも、持続可能な社会、発展の継続のためには、将来を担う子どもたちが重要な役割を担っていくことに変わりはありません。しかし、アマゾン河流域では、まだ通学手段や環境が未整備な地域も多く、ブラジル教育省は陸上交通手段のない地域に対して公的なスクールボートの配備を急いでいます。

ブラジル全土で約15,000隻が必要と言われているスクールボートですが、2010年から3,000隻が順次導入されることになり、ヤマハ発動機のグループ会社YMDBでは、初回の675隻に搭載する船外機を納品しています。また、過酷な使用環境ではメンテナンスの重要性はさらに高くなりますが、YMDBでは4年間のサービスサポートも担うことになっており、使用現地のディーラーとの連携で子どもたちの通学環境の改善への協力を進めています。

YMDB : Yamaha Motor do Brasil Ltda.



信頼性だけでなく、低燃費・低振動・低騒音といった製品特性も高く評価された船外機「F90B」を装着したスクールボート

安心と信頼のための店舗づくりとサービス

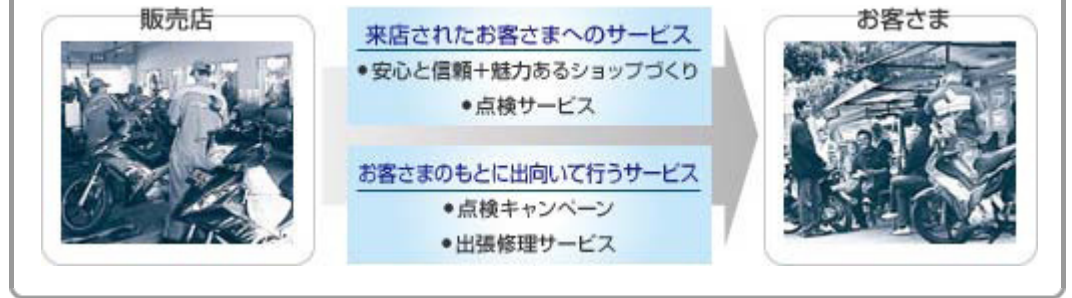
ヤマハ発動機グループでは、アセアン地域や中南米をはじめとする世界の各地でVI（ビジュアル・アイデンティティ）などの導入を行いながら店舗の刷新を進めています。ホスピタリティの改善と信頼感の醸成を目的として、定期点検やメンテナンスのために訪れたお客さまが作業の様子を見ながら、待つ時間を快適に過ごすことができるスペースを設置するとともに、作業ロスやミスを未然に防ぐために効率的かつ充実した設備や工具を備えたサービススペースの設置を進めています。

また、新興国などで店舗が近くにないお客さまに対しては、適切なメンテナンスの重要性に対する理解の浸透を図るとともに安全に製品を使用してもらうために、地域の代理店や販売店と共同で点検キャンペーンや出張修理サービスを実施しています。

店舗を訪れるお客さまへのサービスと、お客さまのもとに出向いて行うサービス、そのどちらにおいても根底にある考え方は、「安心」と「信頼」を感じていただくことによって「お客さま満足」の向上をめざすというものです。

当社グループでは、店舗や設備の刷新、的確な接客マナーや十分な説明スキルを身につけるためのスタッフ指導、補修部品の供給体制の拡充といった総合的なサービス向上への取り組みを、各地の状況や実態を考慮しながらグローバルに推進しています。

販売店とお客さまの関係におけるサービスの役割についての考え方



サービスを支えるスタッフの育成「ヤマハテクニカルアカデミー」

お客さまの満足の継続的な維持向上のためには、接点となるディーラースタッフの対応・サービスの質向上に努め、安心と信頼をいただくことが欠かせません。ヤマハ発動機では、ディーラースタッフが新規購入から購入後の点検整備、さらに買い替えにいたるまでの全てのステージにおいて、必要とされる知識・技術・接客スキルを体系的に身に付けていくために、「ヤマハテクニカルアカデミー（YTA）」の導入をグローバルに推進しています。



お客さまの安心と信頼につながる対応を学ぶメカニック希望の学生たち

YTAのプログラムは、広範囲にわたる知識を習得

する座学と、製品の取り扱い方法や状況に応じたメンテナンス等の実地研修、検定試験で構成されています。また、マニュアルや教材は日本語・英語・スペイン語・フランス語・中国語・ポルトガル語の6ヶ国語が用意されています。

また、2010年の活動としては、経済成長とともに二輪車市場の拡大が進むベトナムで、グループ会社YMVNがホーチミン市にヤマハテクニカルスクールを開校して、お客さまへのサービス向上に取り組んでいます。

YMVN : Yamaha Motor Vietnam Co., Ltd.

お客さまとともに→

製品開発とモノ創り→

お客さま対応／サービス→

安全運転普及活動→

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

安全運転普及活動

安全運転の普及をめざした、グローバルな取り組みをご紹介します。

お客さま:

▶ 製品開発とモノ創り

▶ お客さま対応／サービス

▶ 安全運転普及活動

お客さま

安全運転普及活動

お客さまの安全運転技能向上のために

ヤマハ発動機グループでは安全運転普及活動をより積極的に推進していくために、「ヤマハライディングアカデミー（YRA）」をグローバルに展開しています。YRAのプログラムは、安全普及、モータースポーツ普及、製品普及の3つの要素を統合・体系化したもので、安全普及に関しては、各国の社会環境や交通環境、ユーザー事情に適合したカリキュラムのもとで活動を実施しています。二輪車を中心にATV（四輪バギー車）やウォータービークル（水上オートバイ）、スノーモビルなどの製品領域で取り組んでおり、アセアン、中南米、中東、ロシア、アフリカなどの近年市場が急成長し、安全運転についての指導や啓発教育が社会的な課題となっている地域を中心に活動を推進しています。

タイのグループ会社TYMでは常設のトレーニング施設をもち、二輪車の安全運転実技用のトレーニングコースのほか、大会議室やレクチャールーム、シミュレータールームを備えた総合的な運営を行っています。タイでは二輪車の交通事故が社会的な問題となっており、現地法人TYMでは2005年からはタイ運輸局との共同により、各地で年間50～70回の安全運転講習を行うとともに、政府機関の公式テストの実施による運転免許資格証（免許証発行に必要な証明書）の発行も行っています。この施設は、タイのお客さまの安全運転技能の向上とともに、アセアン地域のディーラーを対象としたインストラクターの養成にも活用されています。

TYM：Thai Yamaha Motor Co., Ltd.



技術習得のために講習をうけるライダー



安全運転についての講義



危険を伴わずにさまざまな状況を体験学習するためのシミュレーター

ヤマハ発動機グループの安全運転普及については、特集記事としても取り上げています。

Close up 3：モビリティ社会の発展に欠かせない“安全”への取り組み
<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/close-up/0003.html>

科学的な理解で「安全」への気付きと意識を醸成

ヤマハ発動機グループでは、実技講習だけにとどまらず知識面での理解を深め意識向上をはかることでも安全運転の普及に努めています。各国の行政や教育機関と連携しながら青少年を対象に展開している「ヤマハ・セーフ・ライディング・サイエンス (YSRS)」は、二輪車の運転に関わる慣性力・摩擦力・衝撃力・運動エネルギーについての物理的な解説や、脳の認知・判断・操作による危険予知・周囲からの被視認性についての重要性を科学的に学んでもらうために、独自に制作した分析映像を用いながらインストラクターによる補足説明や体験型の講習を行うものです。

これは、「学生は科学的な理論を用いた講義への関心が高く、また、その理解も進みやすい」という調査結果にもとづいての取り組みで、日本からはインストラクターの派遣とマスターとなる教材を提供、現地法人と連携して社会状況や交通環境にあわせたカリキュラムのローカライズ対応を行って安全運転普及に取り組んでいます。活動は東南アジアを中心に展開してきましたが、急速な市場成長などによって交通安全意識やマナーの向上の取り組みが社会の課題となってきている、インドや中南米での取り組みも始まっています。



カリキュラムは学生との質疑応答やディスカッションも交えて実施



午前中に講義で学んだことをその日の午後に実技で体験

世界各地で警察などの公的機関を対象とした運転講習を実施

ヤマハ発動機グループでは、社会全体での安全運転の普及を考えた場合に欠かせない、警察などの公的機関を対象とした安全運転技術の講習にも取り組んでいます。これもYRAの一環であり、二輪車やウォータービークル（水上オートバイ）、ATV（四輪バギー）などの製品領域で、日本からのインストラクター派遣と専用カリキュラムによる継続的な活動を実施しています。



アルゼンチンとセネガルでの講習の様子（写真は2009年撮影のもの）

産業用無人ヘリコプターの安全運転普及

毎年、国内外で産業用無人ヘリコプターの安全な運航を行うための研修会を実施しています。2010年6月には農薬散布シーズン直前に控えた韓国の4地域で「2010安全運航研修会」を開催しました。ヤマハ発動機からは指導員が参加して模範フライトを実施、参加者への指導もおこない、安全についての意識・スキル両面での向上をはかることができます。



[お客さまとともに →](#)

[製品開発とモノ創り →](#)

[お客さま対応／サービス →](#)

[安全運転普及活動 →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

株主・投資家

関連するIR情報へのリンクページです。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

株主・投資家

株主・投資家の皆さまとの コミュニケーション

ヤマハ発動機では当社グループの多方面にわたる活動について、株主や投資家の皆さまに正確かつ適切な情報を適時に提供し、説明責任を果たすために専門部門を設置して国内外で積極的にIR活動を行っています。

2010年度については、2月に2009年12月期の本決算発表を実施して、3月には定時株主総会を開催。続く5月・8月・11月には2010年12月期の第1・第2・第3四半期の決算発表を行いました。

アメリカとイギリスでのIRミーティングや、ウェブサイトを通じたIR情報の開示、個人投資家向けのウェブサイトの運営も行うとともに、メディアや証券アナリスト、投資家による個別の取材依頼については、本社での対応に加え、東京での対応も積極的に行いました。



2010年12月期 本決算発表



株主や投資家の皆さまに向けた情報は、
本ウェブサイトの「IR情報」で開示しております。

IR情報

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/ir/index.html>

配当方針

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/ir/stockholder/dividend/index.html>

ディスクロージャーポリシー

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/ir/policy/index.html>

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [従業員](#)

従業員

従業員への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

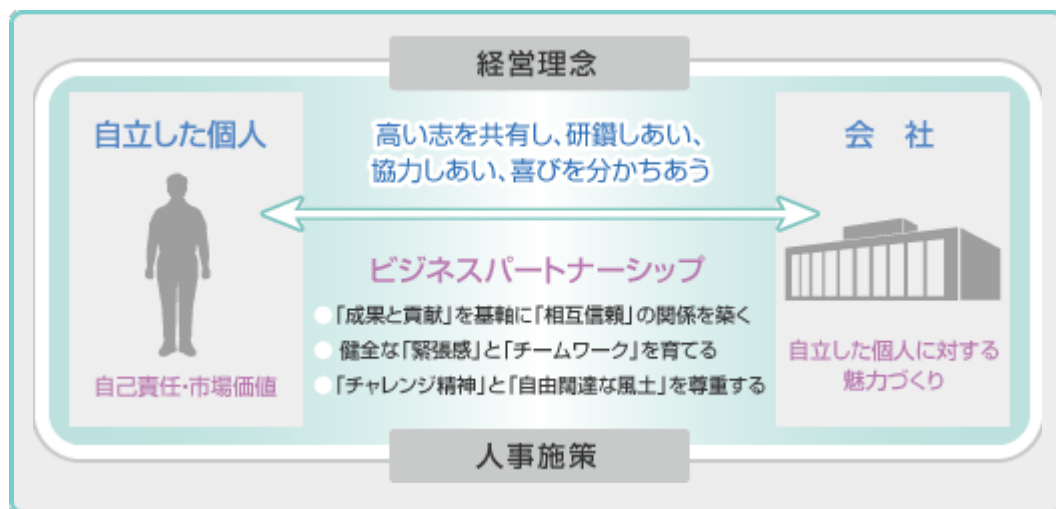
- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

従業員

多様性が尊重され 個人と会社が高め合う職場づくり

ヤマハ発動機グループでは、個人と会社が「高い志を共有し、研鑽しあい、協力しあい、成長しあい、喜びを分かちあえる」関係を築くことをめざしています。そうした一人ひとりの高い力の結集で、社会に対して貢献できる有用な企業活動を展開し、持続可能な社会の発展に寄与することをめざしています。

経済などの外部環境がグローバルに激しく変化する状況であってもお客さまの期待に応え続けるためには、自ら考え責任を持って行動する従業員と、それを育む活気に満ちた職場づくりを欠くことはできないと考えており、個人の活躍と会社の成長を支えるためのさまざまな人事施策を構築し、日々推進しています。



- 従業員とともに →
- 人材育成／キャリア支援 →
- 多様性を活かした職場づくり →
- 仕事と生活の両立支援 →
- 職場の安全衛生 →

人材育成／キャリア支援

人材の育成やキャリア形成支援についての取り組みをご紹介します。

従業員:

- ▶ [人材育成／キャリア支援](#)
- ▶ [多様性を活かした職場づくり](#)
- ▶ [仕事と生活の両立支援](#)
- ▶ [職場の安全衛生](#)

従業員

人材育成／キャリア支援

グローバルな人材育成

ヤマハ発動機グループでは、グローバルなビジネス展開において必要とされる人材育成のために海外研修や留学制度を設けています（2010年の実績は、海外研修5名、海外留学1名）。さらに、自己啓発プログラムのなかでは語学講座も実施（2010年の受講者は延べ376名）するなど、グローバルに活躍できる人材の育成に取り組んでいます。

海外に赴任する従業員については、海外勤務で必要とされる業務スキルに加え、日本とは異なる文化や社会環境についての知識や倫理について赴任前に学ぶための駐在要員育成研修を実施しており、内容についての見直しを2009年に実施、2010年に運用を開始しています。

また、さまざまな業務経験を通じてマルチスキル化を進める施策として、若手従業員の積極的な異動も実施しています。



人材育成のイメージ図（ヤマハ発動機）



所属部門での人材育成の事例（ヤマハ発動機）

自己啓発プログラム（ヤマハ発動機）

語学	技術講座	通信教育 ヤマハフレックス スクール	ビジネス
<ul style="list-style-type: none"> 海外要員育成 プライベートレッスン 異文化コミュニケーション 英会話 英語ビジネススキル養成講座 中国語会話 スペイン語会話 ポルトガル語会話 インドネシア語会話 	<ul style="list-style-type: none"> エンジン技術 計測・解析技術 車体技術 製造技術 技術一般 メカトロ技術 材料技術 開発工学 知的財産 など	<ul style="list-style-type: none"> e-ラーニングコース 生産・技術関連コース ビジネススキルコース 語学関連コース OA関連コース 資格・検定・ビジネスキャリア制度コース など	<ul style="list-style-type: none"> 経営戦略シミュレーション 財務基本講座 PC 講座 財務実務講座 マーケティング基礎講座 など

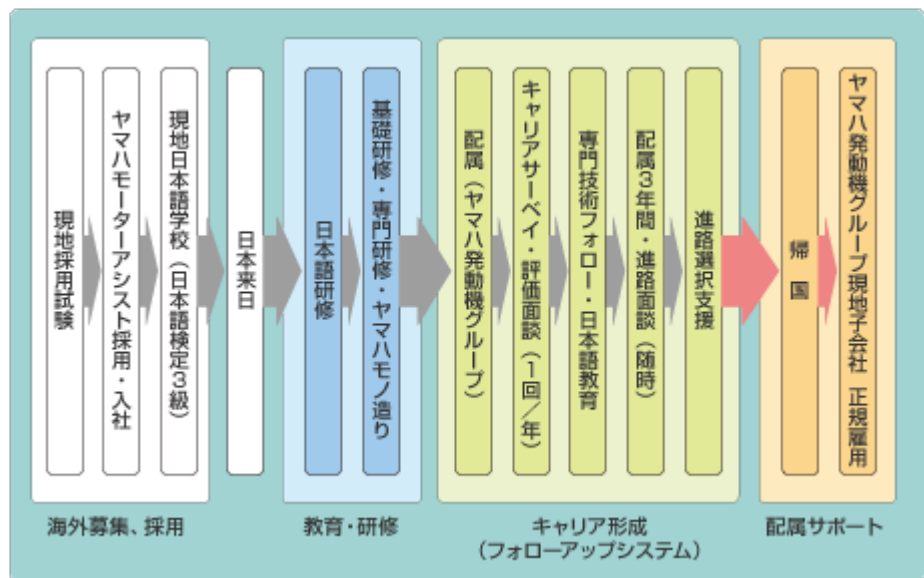
グループ会社における取り組み

ヤマハモーターアシストでは、2008年から国際人材育成プログラムの運用を開始しています。アジアなどの成長著しい新興国市場のグループ会社において、将来リーダー的存在となる優秀な技術者の育成を目的としており、現地での採用後に日本語や基礎スキルを習得する期間を設け、必要なレベルに達した段階で日本での勤務を経験する仕組みとなっています。

2010年も2008年以降にインドネシアで採用された20名近くの人材がヤマハ発動機もしくは国内グループ会社で、3年間にわたる技術習得および育成プログラムに取り組んでいます。



インドネシアで実施された筆記試験



ヤマハモーターアシストの国際人材育成プログラム

ヤマハ発動機グループのグローバルな事業活動に欠かせない人材育成については、特集記事としても取り上げています。

Close up 2：モノ創りの進化を持続させるグローバルな人材育成
<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/close-up/0002.html>

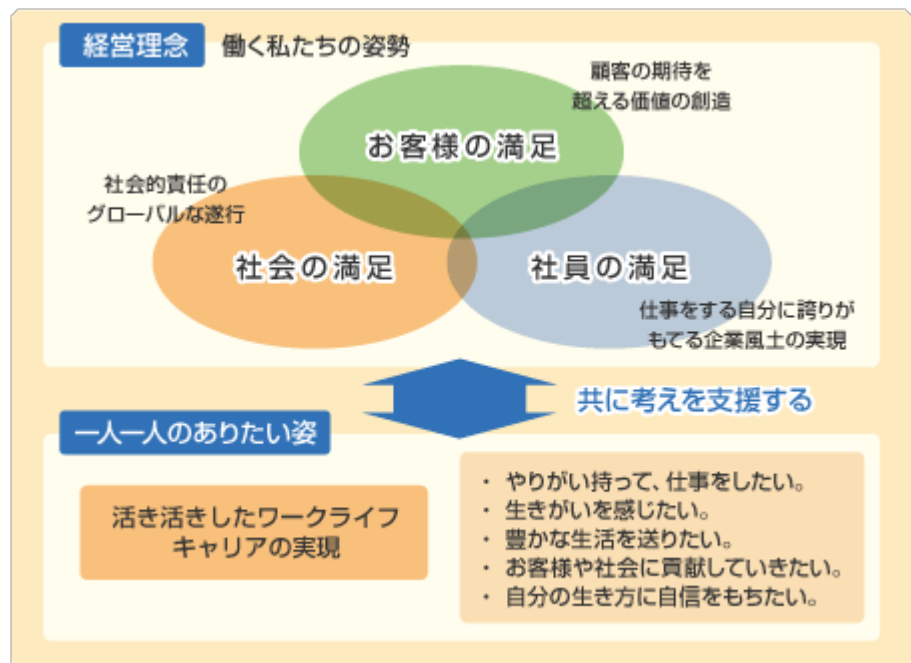
キャリア形成の支援

ヤマハ発動機グループでは、キャリアは仕事上だけで形成されるものではなく、仕事外での経験も含めた「生きるうえでのキャリア」と定義し、「やりがいを持って仕事をしたい」、「自分の生き方に自信をもちたい」といった従業員側の視点に立ったキャリア形成のサポートに努めています。

ヤマハ発動機では、「人は誰でも、自分の目標に向けて、自らを発展させようとするマインドを持っている」という基本認識に基づいて「キャリア相談室」を設置し、従業員一人ひとりのキャリア形成を支援しています。2010年には、社外のセミナーで従業員へのキャリア形成支援活動の事例を発表（計3件）、社内ではイントラネットでの継続的なキャリア支援の取り組みなど、情報の発信・提供についても積極的に取り組んでいます。個別面談によるキャリア相談に関しては、2010年度の新規受付は101名となっています。



キャリア形成支援ツールの資料より



経営理念（企業）と個人の関係のイメージ

ビジネスリーダーの育成

ヤマハ発動機では、将来の経営を担う人材を育成することを目的として、2003年から「ヤマハビジネススクール（YBS）」を開催しています。経営者を囲んでの経営塾、外部講師を招いて実施するテーマ別セッション、各種専門家による自己開発プログラムなどをカリキュラムとし、ヤマハ発動機の「経営のDNA」の継承による10年、20年先の競争力の維持・向上に努めています。2003年からの延べ参加人数は470名となっています。

セルフバリューデザインのための機会提供

人材育成には画一的なモデルやパターンがあるわけではなく、一人ひとりにあったキャリア形成の道があるべきです。ヤマハ発動機では、変化の激しさが増す一方の近年のビジネス環境においては、そのステップを所属や役職など現在の延長線上で描くのではなく、「自らの意志に基づき、将来の自らの価値を設計する」というセルフ・バリュー・デザイン（自己価値設計）の考え方が強く求められるようになってきていると認識しています。ヤマハ発動機では、1998年に社内公募制である「セルフ・バリュー・チャレンジ制度（SVC）」を導入して以来、海外駐在あるいは新規プロジェクトの立ち上げなどに際して、その要員を広く全社的に求めるように努めています。この制度は上司の承認を踏まえないで応募する仕組みとなっており、1998年からの延べ公募件数は240件、延べ異動人数は185名となっています。

従業員とともに →

人材育成／キャリア支援 →

多様性を活かした職場づくり →

仕事と生活の両立支援 →

職場の安全衛生 →

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

多様性を活かした職場づくり

ダイバーシティへの配慮など、活力ある職場づくりの取り組みをご紹介します。

従業員:

- ▶ 人材育成／キャリア支援
- ▶ 多様性を活かした職場づくり
- ▶ 仕事と生活の両立支援
- ▶ 職場の安全衛生

従業員

多様性を活かした職場づくり

各自が個性を尊重し合う職場

ヤマハ発動機グループは「企業活動の原点は人」という基本的な認識をもって人権に対する考え方を『倫理行動規範』のなかに明示しており、活力ある職場の実現にはまず各自が個性を尊重し合う環境づくりが欠かせないと考えています。

ヤマハ発動機では、従業員と会社の関係を「ビジネスパートナーシップ」、会社が担う役割を「自立した個人に対する魅力づくり」と定義した人材施策の一環として、全ての正規従業員を対象としたキャリアサーベイを行っています。これは各自に与えられる業務上の役割において、本人による自己評価と上司による評価を行いながら、今後3年間のキャリアプランについて相談の機会を設けるものです。

倫理行動規範（PDFが別ウィンドウで開きます）

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/download/pdf/ethical-codes-book.pdf>

障がい者の安定的な雇用

ヤマハ発動機は、「障がい者と健常者が一緒に就労できる職場運営を行う」という考えのもとに「障がい者雇用促進委員会」を設置し、各部門に配置した担当委員による業務分析などによる職場環境の整備に努めています。

2010年12月末の時点で重度障がい者76名、軽度障がい者59名の計135名が活躍しており、障がい者雇用率は1.86%となっています。また、障がい者が働く職場に対する多面的なサポートが行えるように、手話教室や要約筆記研修の実施など、より円滑なコミュニケーション実現のための取り組みにも力を入れています。



手話教室の様子

定年後の再雇用制度

ヤマハ発動機では定年後の再雇用制度を導入しています。60歳の定年以降も就労する意欲をもった人材が、業務経験で培った知識やスキルを発揮できるだけでなく、若手従業員にとって有益な経験やノウハウを継承する制度として定着しています。

社員意識調査

ヤマハ発動機では、いきいきとした職場づくりのための社員意識調査を継続的に実施して、社員の意識・実態把握に努めています。経営・職場・仕事・上司・人事制度・コンプライアンスの各カテゴリーで設問を設定し、結果分析から抽出された課題については、経営層や各部門長へのフィードバックミーティングを実施して施策への反映を行っています。

[従業員とともに →](#)

[人材育成／キャリア支援 →](#)

[多様性を活かした職場づくり →](#)

[仕事と生活の両立支援 →](#)

[職場の安全衛生 →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

仕事と生活の両立支援

従業員のワークライフバランス実現のための取り組みををご紹介します。

従業員:

- ▶ 人材育成／キャリア支援
- ▶ 多様性を活かした職場づくり
- ▶ 仕事と生活の両立支援
- ▶ 職場の安全衛生

従業員

仕事と生活の両立支援

ワークライフバランスの実現のために

従業員のワークライフバランス（仕事と生活の両立）の実現を支援するため、ヤマハ発動機では多様な働き方を選択できる体制の整備を進めています。

フレックスタイム制度や定時退社デー、育児や介護のための休職制度、さらに事業所内託児施設「わいわいランド」を設け、休職者に対しては休業中の定期的な情報提供を行うとともに、円滑に復職するための環境整備にも努めています。また、短時間勤務制度を2009年に導入するなど、従業員が各自の状況に適した働き方ができるように選択肢の充実に取り組んでいます。2010年の有給休暇の取得率※は71.5%となっています。



バリアフリーやセキュリティについても配慮し、0歳児から6歳児までの子どもが過ごすヤマハ発動機の託児施設「わいわいランド」は2005年から運営されている。

※取得率は全正社員の「年間有給休暇発生日数」に対する実際の「年間取得日数」で算出しています。

ヤマハ発動機の主な育児・介護支援制度

制度	内容
育児休職	子どもの満2歳の誕生日まで休職可能 (2010年取得：女性109人 男性1人)
介護休職	1年以内で本人が申請する期間で休職が可能 (2010年取得：男性1人)
看護休暇	小学校就学前の子どもを看護するための休暇を、子ども1人の場合は年間5日まで、子ども2人以上の場合は年間10日まで取得可能
フレックスタイム制度	6：30～21：45の時間内で労働時間の設定が可能 ※コアタイム 例＝10：15～15：00
勤務の軽減	小学校の就学に達するまでの子どもを養育する従業員、または家族を介護する従業員に対しては、時間外労働の制限や深夜業務免除
短時間勤務制度	2時間の勤務時間短縮が可能 (2010年取得：女性70人 男性1人)
その他	定時退社デーの設定（毎週水曜日、当社休日の前日、給与日、賞与日） 3日連続の有給休暇取得（30歳以上は5歳毎に5日連続取得）

[従業員とともに →](#)
[人材育成／キャリア支援 →](#)
[多様性を活かした職場づくり →](#)
[仕事と生活の両立支援 →](#)
[職場の安全衛生 →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) 2008 Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved.

職場の安全衛生

従業員が安全な職場環境で健康に働くための取り組みをご紹介します。

従業員:

- ▶ 人材育成／キャリア支援
- ▶ 多様性を活かした職場づくり
- ▶ 仕事と生活の両立支援
- ▶ 職場の安全衛生

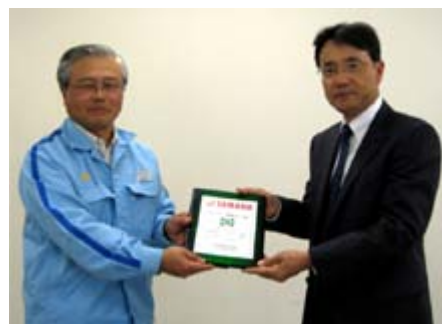
従業員

職場の安全衛生

安全な職場づくり

ヤマハ発動機では、中央安全衛生委員会が中心となって安全な労働環境の整備をグローバルに推進しています。導入から6年目となった労働安全衛生マネジメントシステム（OSHMS[※]）に基づいてリスクアセスメントを実施、職場の潜在的な危険性や有害性の発見につとめ、労働災害防止活動に取り組んでいます。また、設備の安全化とともに、安全管理者研修や監督者の能力向上研修などの階層別の教育・研修、安全衛生大会の開催などによって安全を支える人材育成にも取り組んでいます。

2008年から進めているグループ会社へのシステム導入については、2010年までに国内9社、海外1社がグループ認証を取得しています。2011年の取り組みとしては、アセアンにおけるグループ認証の取得を計画しています。



グループ認証の授与：東洋ベスク（上）、ファインキャテック（下）

※OSHMS：Occupational Safety & Health Management System

ヤマハ発動機では環境マネジメントシステムと統合した「統合マネジメントシステム」を2011年4月1日より運用しています。

[「統合マネジメント方針」についてはこちら](#)（別ウィンドウでPDFが開きます）

2010年のグループ認証取得

地域	事業所名
日本国内	ファインキャテック、東洋ベスク、ヤマハ熊本プロダクツ
海外	ICC（タイ）

※ICCは2011年6月1日付でYamaha Motor Parts Manufacturing (Thailand) Co., Ltd.に社名変更しました。

心と体の健康のためのサポート

ヤマハ発動機では、従業員の心と体の健康維持・改善を支援するためにさまざまな活動を推進しています。

生活習慣病の予防・改善については、ウォークラリーイベントの開催、年2回の「歩け歩け運動」の実施などを通じて、運動習慣による肥満の防止や持久力向上に努めるなど、健康で活力のある職場づくりに取り組んでいます。また、禁煙の取り組みを支援するために、健康保険組合との協同で希望者に対する禁煙補助剤の提供を行っています。喫煙率については2009年の35.6%から33.4%と減少傾向にあります。

メンタルヘルスに関するサポートとしては、産業医による保健指導、新任基幹職・監督者を対象としたメンタルヘルス研修、海外駐在員や中途で入社した社員に対する支援といった取り組みを引き続き実施しています。



希望者に配布される禁煙ガムとニコチンパッチ

- 従業員とともに →
- 人材育成／キャリア支援 →
- 多様性を活かした職場づくり →
- 仕事と生活の両立支援 →
- 職場の安全衛生 →

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

取引先

CSRや環境に配慮した調達活動や取引先とのパートナーシップについてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

取引先

ビジネスパートナーとの協働を深め 持続的な成長に取り組む

ヤマハ発動機グループの製品は、国内外のさまざまなサプライヤーとの協働によって成り立っています。そして、事業のグローバル化によって海外現地工場での調達比率も高まり、サプライチェーン全体もより複雑に拡大していくなかで、企業の社会的責任という視点における「調達」の重要性はさらに高まってきていると考えています。調達や販売において関係をもつ取引先への基本方針は、CSR基本方針のなかに定めており、相互信頼や長期的な視野にたった相互繁栄を目指し、調達にあたっては国籍や規模にかかわらず広く世界に門戸を開くこと、総合的な評価にもとづいて判断すること、そして、各国・地域の競争法を遵守した公正な取引の維持に、ともに持続可能な成長をめざすパートナーとしての協働を深めながら取り組んでいます。

サプライチェーン全体でCSRに取り組むために

ヤマハ発動機グループは、グローバルに事業活動を展開する企業として、サプライチェーン全体で取り組むCSR推進の重要性を認識し、サプライヤーとのパートナーシップが不可欠であると考えています。モビリティに関わるメーカーとして、事業活動や製品における環境負荷物質の低減や、エネルギー・資源の利用効率の向上にも積極的に取り組んでおり、グリーン調達ガイドラインをはじめとする基準やさまざまな情報をサプライヤーと共有しています。また、サプライチェーン全体でのCSRの取り組みを展開するため、従来からの環境対応活動における「グリーン調達ガイドライン」に加え、安全・品質、リスクマネジメント、コンプライアンス、適正な情報開示などを含めたCSR基本項目に関わる「調達先CSRガイドライン」を2010年7月に策定しています。このガイドラインをもとに取引先との定期的な業務連絡会などでCSRの実践を要請し、それぞれの調達先に対しても同様に展開することをお願いしています。

ヤマハ発動機グループグリーン調達ガイドライン（PDF:日本語/英語/中国語）はこちらでご覧いただけます。

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/environmental-field/publish/>

公正な取引、法令遵守の徹底

持続的かつ発展的な事業活動には信頼関係がその基盤としてあることが必須です。そのためにはサプライチェーン全体で公正な取引が行われていることが不可欠であると考えています。

ヤマハ発動機グループでは、経済産業省から発行されている「自動車産業適正取引ガイドライン」を踏まえたうえで、下請法などの法令遵守に努めるとともに、サプライヤー各社に対しても適切な情報共有や取引における同様の取り組みをお願いしています。

また、法令だけにとどまらず、ヤマハ発動機グループの倫理行動規範の開示や講習会などを通じた、信頼関係の基盤づくりにも努めており、今後も事業活動の根幹に「お客さまの安全・安心」をおき、人権や文化・慣習の尊重、地域社会との関係や地球環境への配慮、情報の保護・管理といった社会的な責任を満たした、総合的な取引関係の構築を進めていきます。



関係者を対象に開催された「取引先業務連絡会」

販売店との取り組み

部材の調達はもとより、販売・サービスにおいてお客さまとの接点である販売店との連携は、ヤマハ発動機グループのCSR推進にあたって欠かせない要素です。

日本国内でヤマハスポーツバイク正規ディーラーであるYSPでは、ヤマハ発動機販売が取り組む、二輪車の社会環境づくり、マナー促進活動、二輪車リサイクル、植樹キャンペーン環境活動、盲導犬育成募金活動、などに協働で取り組んでおり、地域や社会との関係構築において重要な役割を担っています。

ヤマハ発動機グループでは、定期的なディーラーミーティングなどの開催において、販売店との連携強化に取り組んでいます。

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

地域・社会

地域社会への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

地域・社会

地域や社会との信頼関係 共存共栄のために

ヤマハ発動機グループは活動拠点を世界の各地にもち、地域社会に支えられて事業活動を行っています。また、製品が世界各地の人々のより豊かな生活につながることを願っています。ヤマハ発動機グループのすべての企業が、地域社会との共存共栄をはかり、持続可能な信頼関係を築くことが重要との認識に立ち、そのためには地域のステークホルダーの皆さまと日常的なコミュニケーションを通じて、信頼関係を維持・向上することが大切であると考えています。

活動の領域は4つに重点化されており、スポーツやモノ創りを通しておこなう将来を担う人たちの育成をはじめ、事業活動で得られた交通安全普及や環境などに関するさまざまな知見を活かした取り組みを行っており、従業員一人ひとりのボランティア活動をサポートする「4万人のV作戦」をスローガンとした活動も推進しています。

ヤマハ発動機グループでは、技術やノウハウ、グループ各社の施設など企業の持つ資源をもとに、行政・学校・NPOなどの地域の皆さまとの協働によって持続可能な社会の実現に貢献する取り組みを進めていきたいと考えています。

社会貢献活動の重点領域

取り組みテーマ		グローバル課題			ローカル課題
		将来を担う人たちの育成	地球環境の保全	交通安全普及	地域社会の課題
活動	社会との共存のための社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツを通じた心身の育成 ・ モノ創りを通じた創造性の育成、など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域社会への環境教育 ・ 生物多様性の尊重、など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会への交通安全教育 ・ 啓発活動、など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当社製品や人材、ノウハウを使った地域支援、など

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団



[地域社会とともに →](#)

[社会貢献活動の事例 →](#)

[従業員によるボランティア活動の事例 →](#)

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

社会貢献活動の事例

地域社会に対する貢献活動の事例をご紹介します。

地域・社会:

▶ 社会貢献活動の事例

▶ 従業員によるボランティア活動の事例

地域・社会

社会貢献活動の事例

ヤマハ発動機グループでは事業活動における社会貢献はもとより、グループ会社が所在する国や地域においてステークホルダーとのコミュニケーションを通じた社会貢献活動にも取り組んでいます。

将来を担う人たちの育成



ヤマハ発動機グループの製品は長年にわたる技術とノウハウの蓄積がその背景にあり、そのモノ創りを支え、理解する人材の育成と環境づくりは重要な取り組み課題となっています。長期的な視点による環境づくり、社会全体での人材育成に対する貢献を・・・・・・・・

[全文とその他の事例はこちら →](#)

地球環境の保全



2010年に会社設立から20年を迎えたポルトガルの二輪車などの販売会社YMPでは、スクーター・二輪車・ATV（四輪バギー車）を1台販売するごとに2本の木を植樹する活動「Eco Yamaha」を実施しました。ポルトガルでは年間数千件に及ぶ・・・・・・・・

[全文とその他の事例はこちら →](#)

交通安全普及



ヤマハ発動機グループでは、二輪車の正しい使い方や楽しさとともに安全運転の大切さについての認知向上をはかる総合的な普及活動『ヤマハライディングアカデミー（YRA）』をグローバルに展開していますが、二輪車の需要の9割以上を占める新興国・・・・・・・・

[全文とその他の事例はこちら →](#)

地域社会の課題



ヤマハ発動機では、NPO 法人沖縄観光産業研究会と恩納村漁業協同組合を母体とする官民共同プロジェクト「チーム美らサンゴ」を支援しています。沖縄などの亜熱帯の海において急速に広がっている珊瑚の白化現象、オニヒトデの食害、赤土の流出、海水温の上昇・・・・・・・・

[全文とその他の事例はこちら →](#)

[地域社会とともに →](#)

[社会貢献活動の事例 →](#)

[従業員によるボランティア活動の事例 →](#)

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[△ このページの先頭へ](#)

将来を担う人たちの育成

地域社会における人材育成への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ 将来を担う人たちの育成
- ▶ 地球環境の保全
- ▶ 交通安全普及
- ▶ 地域社会の課題

地域・社会

将来を担う人たちの育成

モノ創りとの関わりを志す学生のインターン研修をサポート

ヤマハ発動機グループの製品は長年にわたる技術とノウハウの蓄積がその背景にあり、そのモノ創りを支え、理解する人材の育成と環境づくりは重要な取り組み課題となっています。長期的な視点による環境づくり、社会全体での人材育成に対する貢献を考えて、ヤマハ発動機グループ各社では学生インターンシップの受け入れを行っています。



計測機器の使い方や校正についての研修

2010年3月には、独立行政法人国立高等専門学校機構が技術者の育成を目的に2008年からスタートし

ている海外インターンシップ研修に日本企業5社とともに協力し、日本からの研修生4名を販売会社TYMが中心となったタイのグループ会社4社で協力して受け入れています。マーケティング、企画・開発、製造、生産管理、品質管理、出荷、セールス、サービスなど、モノ創りの現場やさまざまな仕事の流れについての体験をしてもらい、販売店や安全運転普及活動の現場も訪れて3週間にわたる研修を終えました。

二輪車などのデザインを行う日本のグループ会社エルム・デザインでは、米国のArt Center Design of Collegeの学生を約2ヵ月間受け入れ、デザイン業務の体験学習を実施、同じく日本のヤマハモーターエンジニアリングでは豊橋技術科学大学の学生に二輪車のCAE構造解析などの研修を実施、ヤマハモーターエレクトロニクスや東洋ベスクでは、職業体験をとおして「働くこと」の意義や適性、自己の可能性を探る機会を提供する工場現場研修を地元の中学・高校7校を対象に行うなど、モノ創りの現場を通じた将来を担う人材育成への貢献に取り組んでいます。

TYM：Thai Yamaha Motor Co., Ltd.

事業で培った技術や知識を活用した講座を実施

ヤマハ発動機では、二輪車、マリンなどの事業やモノ創りで培った知識と技術を活用した、子どもたちの「モノ創りの心」を育む活動に継続的に取り組んでいます。

『ボートふしぎ発見講座』は、船が浮く仕組みや船形の違いによるスピードの違いを分かりやすく解説する実演や、クリアファイルを使ったボートの模型作りを体験してもら

う講座です。主な対象は小学生で、参加した子どもからは、「重い船が浮く理由がよくわかった」「自分のボートが作れて楽しかった」といった声が寄せられています。また、ヤマハ発動機では学術的なモノの見方や考え方だけでなく、実務経験に基づいた捉え方を学生に身につけてもらうために、実務経験が豊富な従業員を大学に講師として派遣する「企業講座」についても継続的に取り組んでいます。



	ボートふしぎ発見講座		大学講座	
	参加人数	講座回数	参加延べ人数	講座回数
2010年	1,245人	64回	2,845人	38回
2009年	540人	32回	2,243人	43回
2008年	321人	16回	2,280人	44回

将来を担う人たちの育成 →

地球環境の保全 →

交通安全普及 →

地域社会の課題 →

CSR トップページ | CSR の考え方 | コーポレート・ガバナンス
 お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR 情報
 レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

地球環境の保全

地域社会における地球環境の保全への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ [将来を担う人たちの育成](#)
- ▶ [地球環境の保全](#)
- ▶ [交通安全普及](#)
- ▶ [地域社会の課題](#)

地域・社会

地球環境の保全

ポルトガルでの植樹活動「Eco Yamaha」

2010年に会社設立から20年を迎えたポルトガルの二輪車などの販売会社YMPでは、スクーター・二輪車・ATV（四輪バギー車）を1台販売するごとに2本の木を植樹する活動「Eco Yamaha」を実施しました。

ポルトガルでは年間数千件に及ぶ山火事の発生が問題となっており、特に2010年には前年に比較して5割増（125,000ヘクタール以上）となっていました。YMPでは「社会貢献」と「事業活動で生じる環境負荷に対する軽減効果」の2つの観点から、この植樹キャンペーンを実施。対象エリアは首都リスボンから北380kmにあるコア溪谷のピラ・ノバ・デ・フォズ・コア（※数千を越える旧石器時代の岩絵遺跡が世界文化遺産に指定されている）で、地中海地方や欧州西部に分布するイチゴノキとトキワガシを1万本（各5000本）植樹して、2010年11月に行われた完了記念イベントはTVなどのメディアによる取材を受けるなど、地域のエコマインドの醸成にもつながりました。



俳優やトップモデル、プロサッカー選手、ヤマハの契約ライダーも参加して11月20日に行われた植樹キャンペーン完了の記念イベント

YMP：Yamaha Motor Portugal S.A.

- [将来を担う人たちの育成](#) →
- [地球環境の保全](#) →
- [交通安全普及](#) →
- [地域社会の課題](#) →

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

交通安全普及

地域社会における安全運転普及への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ 将来を担う人たちの育成
- ▶ 地球環境の保全
- ▶ 交通安全普及
- ▶ 地域社会の課題

地域・社会

交通安全普及

新興国におけるヤマハライディングアカデミー活動

ヤマハ発動機グループでは、二輪車の正しい使い方や楽しさとともに安全運転の大切さについての認知向上をはかる総合的な普及活動『ヤマハライディングアカデミー（YRA）』をグローバルに展開していますが、二輪車の需要の9割以上を占める新興国における活動も積極的に進めています。経済成長とともに急速にモータリゼーションの発展が進むインドでは、グループ会社IYMが認定インストラクター養成の取り組みを積極的に進めており、広い国土をエリア分けして普及活動の強化に取り組んでいます。重要な交通インフラとして二輪車が普及しているベトナムでの事例としては、子どもたちに楽しみながら安全運転の大切さを学んでもらうために、キャラクターを使い、紙芝居や交通安全のクイズを実施するなどの工夫をこらしたイベントを1年間で18回開催（延べ参加人数は11,160名）しています。アセアンやインド、ロシアなどの新興国における2010年の活動実績は、6カ国で250回以上の開催、26,000名を超える参加人数となっています。

IYM：India Yamaha Motor Pvt. Ltd.



ロシアの子どもたちに二輪車の基本的な操作方法や動きの特徴を説明するYRA認定インストラクター



ヘルメットなどを着用することの大切さについて楽しみながら学ぶベトナムの子どもたち

[将来を担う人たちの育成 →](#)

[地球環境の保全 →](#)

[交通安全普及 →](#)

[地域社会の課題 →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問い合わせ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) 2008 Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved.

地域社会の課題

地域社会における課題解決への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ 将来を担う人たちの育成
- ▶ 地球環境の保全
- ▶ 交通安全普及
- ▶ 地域社会の課題

地域・社会

地域社会の課題

官民共同プロジェクト「チーム美らサンゴ」を支援

ヤマハ発動機では、NPO法人沖縄観光産業研究会と恩納村漁業協同組合を母体とする官民共同プロジェクト「チーム美らサンゴ」を支援しています。沖縄などの亜熱帯の海において急速に広がっている珊瑚の白化現象、オニヒトデの食害、赤土の流出、海水温の上昇による環境変化などを受けて、自然保護意識の高まりとともに2003年より活動している「チーム美らサンゴ」は、恩納村海域で珊瑚の植え付けを行うことで生態系の再生を促し、沖縄の観光シンボルとも言える「豊かな珊瑚礁の海」の復活をめざす取り組みです。沖縄を代表する自然保護活動のひとつとして認知されており、2009年までに延べ700名以上が参加、1200本以上の苗を植え付けてきています。2010年11月にヤマハ発動機グループのマリン事業50周年を記念するイベントとして実施された『沖縄恩納村サンゴ苗植付けツアー』には、ヤマハ発動機の従業員とその家族10名が参加、恩納村漁業協同組合の養殖場を見学して取り扱いの注意について学び、模型を使った植え付け方法の練習を行った後に、水深3～5mほどの湾内ポイントに移動して岩礁にサンゴ礁の苗を植え付ける作業を行いました。ヤマハ発動機グループでは今後も従業員の参加を募り、継続的に活動サポートを行っていく予定です。



珊瑚の植え付け活動自体は1997年にスタートしており、現在各地で行われているサンゴの植え付け活動の発端の一つとしても認知されている

将来を担う人たちの育成 →
地球環境の保全 →
交通安全普及 →
地域社会の課題 →

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

Copyright (C) 2008 Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved.

従業員によるボランティア活動の事例

従業員による地域社会でのボランティア活動の事例をご紹介します。

地域・社会:

▶ 社会貢献活動の事例

▶ 従業員によるボランティア活動の事例

地域・社会

従業員によるボランティア活動の事例

ヤマハ発動機グループでは企業活動としての社会貢献活動に加え、従業員によるボランティア活動についても、社内イントラネットの情報提供システムを活用したサポートを行っています。ここでは日本国内における一部の事例についてご紹介します。

さまざまな社会貢献活動の情報を社内で共有促進

ヤマハ発動機グループでは、社内イントラネットの情報提供システムを活用したボランティア活動についての情報提供を行っています。掲載される情報は、国内外のグループ会社による社会貢献活動や従業員によるボランティア活動の報告をはじめ、NPOなどの関連団体の紹介、ボランティア活動に必要なさまざまな知識、活動スケジュールなどで、活動に参加を希望する従業員はシステムを使って活動グループへの登録ができるようになっていきます。

また、従業員のボランティア意識の啓発と行動を始める“きっかけ作り”として2004年から「4万人のV作戦

※」を展開しています。従業員が少なくとも年1回はボランティア活動をすることにより、グループ全体で4万人が社会貢献をおこなうことを目指しており、2010年の活動は延べ42,834人、3年連続の目標達成となりました。海外からの留学生のホームステイ先、福祉施設や保育園でのボランティア演劇、災害支援に役立つトライアルバイクの技術講習など、さまざまなボランティア活動が行われています。

※この活動を開始した2004年当時のグループ従業員数が約4万人のため、Vはボランティアを指しています。



長期にわたる活動事例

長期にわたるボランティア活動のなかの一つには、従業員グループ「おもしろエンジンラボ」が取り組んできた子供向けの教室があります。地域の小学生などを対象に夏休みなどを利用して行われてきた活動で、エンジンの分解や組み立て、ウインドカー工作などを楽しみながら、その構造、仕組みを学んでもらうことを目的としています。



これまでに開催は累計100回を超え、約5,200名が受講しています。

書き損じはがき等の収集による募金活動

ヤマハ発動機グループの従業員によるボランティア活動には、書き損じはがきや使用済み切手、ペットボトルキャップ、プリペイドカードの収集活動もあります。

2010年は、書き損じはがき738枚（32,153円相当）を磐田ユネスコ協会に、使用済み切手9.3kg（9,310円相当）をNPO法人静岡県ボランティア協会に、ペットボトルキャップ335,000個（837.5kg、ワクチン418.7人分）をNPO法人エコキャップ推進協会に寄付しています。これらの寄付は関係団体を通じて、貧困国の子供たちを支援する活動や、タイにおける象の保護活動に使われています。

[地域社会とともに →](#)

[社会貢献活動の事例 →](#)

[従業員によるボランティア活動の事例 →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#)

[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)

[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

地球環境

地球環境への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

地球環境

持続可能な発展をめざした地球環境との共存

地球温暖化の進行、エネルギーや水の利用、生物多様性の保全など、さまざまな環境・資源問題が世界レベルで深刻化しています。モビリティを支える製品をグローバルに提供する企業が担う社会的責任として、これらの課題への真摯な対応が求められているとヤマハ発動機グループは考えています。

私たちは、グローバル社会が共有するこうした課題に対する認識をさらに高めながら、当社グループの強みを活かした活動を進めています。なかでも、当社グループの事業活動の基軸であるパーソナルモビリティが果たす役割は非常に大きいと認識しており、技術革新による高品質で環境負荷の小さい小型ビークルの実現、電動アシスト自転車や電動二輪車といったスマートパワー*製品の普及、ハイブリッドシステムなどの研究開発、事業で培った人材・モノ・ノウハウによる社会貢献活動の推進など、企業活動の全てにおいて地球環境との調和に配慮することが重要であると考えています。

ヤマハ発動機グループは「世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する」ことを企業目的として、多様な価値の創造に努めてきましたが、今後も新たな「環境計画2020」に沿って、地球温暖化などの環境問題への対応をはじめ、全体調和の中で持続的な社会の発展とともに成長を目指していきます。

*スマートパワー＝電動車両を基軸とする新しいモビリティを追求した新動力源

ヤマハ発動機グループ 環境計画2020

	取り組み分野	重点取り組み項目	2020年目標
エコ プロダクツ	環境・お客さま 基点の製品開発による 『環境魅力向上』	エコプロダクツの領域は、全社の長期ビジョン “Frontier2020”として展開する	
		「環境負荷物質のリスク低減」 「グリーン調達」の推進	環境負荷物質の 把握と代替の推進
エコ オペレーショ ン	環境負荷最小化を 目指したグローバルな 事業活動による 『環境保全』	温室効果ガスの 排出量削減	CO2原単位で 年平均1%削減
		「3Eで3Rを」 「水使用量の削減」 3E：つくりやすく、直しやすく、 分解しやすい	限りある資源の有効利用と 循環利用の促進

		3R：リデュース・リユース・リサイクル	
エコ マネジメント	グループ環境 ガバナンスの仕組み 強化による 『環境管理』	「グループ全体の環境管理 システムを構築し運営」	グループ全体の運営と ローカルな活動と 連携が取れている
エコ マインド	持続可能な地球環境を 目指した多様な エコ活動による 『環境貢献』	「継続的な環境教育による 意識改革」	グループ全員が 高い目標意識で 環境取組を 積極的に行っている
		「感覚環境（臭気、 騒音など）の改善」 「地域とのコミュニケー ション」 「生態系の保全」	企業市民として 地域から信頼され、 敬愛を受けている
		「環境を切り口とした 積極的な情報発信」	環境先進企業として 社会から高い評価を 受けている

地球環境とともに →

2010年の計画と実績 →

環境マネジメント →

CO2排出量削減の取り組み →

環境負荷物質削減の取り組み →

資源循環や使用量削減の取り組み →

生物多様性保全の取り組み →

エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →

グループや各工場の環境データ →

環境関連情報

- ※ グリーン調達ガイドライン
- ※ バイク・スクーター車種別環境情報
- ※ 二輪車「3R」設計について
- ※ 二輪車リサイクルシステム
- ※ FRPプール エコリニューアル
- ※ FRP船リサイクルシステム
- ※ バイオマスプラスチック製梱包材について

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

2010年の計画と実績

環境活動の2010年の計画と実績を一覧にご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム
- 関連リンク:
- ▶ バイク・スクーター車種別環境情報
- ▶ FRPプールエコリニューアル
- ▶ バイオマスプラスチック製梱包材について

地球環境

2010年の計画と実績

めざす姿

2010年計画	2010年実績
「環境の柱」に基づく、製品・サービスの開発	各事業部直近の中期計画に落とし込み完了

環境保全課題

	2010年計画	2010年実績	
温室効果ガス	1.CO2排出量把握と削減活動	グループ各社が、原単位（売上高）1.5%/年削減を達成	生産量減少にともない、対象108社のうち達成は38社にとどまる
	2.製品の燃費向上	各事業部製品ごとに燃費改善対象モデルを設定・開発	計画通り立上げ（小型化、FI化、4ST化など）
	3.製造段階でのCO2削減	YMC全社製造、総量26%削減（1990年比）	総量49.0%削減となり達成
	4.物流段階でのCO2削減	原単位（輸送量）で3%削減（2007年比）	2009年に対して大幅に改善したものの、原単位（輸送量）で2.2%に留まり未達成
有害物質	1.製品・排出ガス低減	レギュレーションの前倒し	100%レギュレーションクリア
	2.VOC排出量削減（2社※1）	原単位（塗装面積）で50%削減（2000年比）	60.8%削減となり達成
	3.グリーン調達活動	国内・海外の全環境連結拠点にてグリーン調達を推進	各国法令や業界自主規制に基づくグリーン調達を実施
	4.法律・自主行動基準の遵守	部品含有環境負荷物質把握システム（E-sis）を全26社（拠点の廃止に伴い2008年より1社減少）にて運用	予定していた全26社にて運用
3R推進	1.開発段階での「3R」推進	リユース&リサイクル可能率95%	7事業製品中6事業製品でリサイクル率95%以上を達成
	2.製造段階での「3R」推進	廃棄物の直接・間接埋立量0トン	0トン
		製造部門のリサイクル率100%	100%
3.製造廃棄物排出量（3社※2）	スーパーゼロエミッション継続	スーパーゼロエミッション継続達成	
	施策の実行と効果の確認	分別徹底による有価物化などの推進	

廃棄物 ／ 資源 保護			継続
	4.国内製品 リサイクル体制の確立	2011年10月からリサイクル無償化実施にむけた、廃棄二輪取扱店に対するリサイクルシステムの意識向上	全国110会場でリサイクルシステムの啓発活動を実施
		産業用無人ヘリコプターのリサイクルシステムの維持管理	適正処理の周知徹底（全数適正処理継続）
		SBRA※3による鉛バッテリーのリサイクルシステム構築に関する情報収集と対応	業界のバッテリーワーキンググループに参画し活動中
	5.部品梱包材の削減	梱包資材の削減。リターナブル率68%	71.3%となり達成
	6.販路でのリサイクル推進	アセアン地域におけるエコパートナー店政策の展開（目標店数：1000店）	エコパートナー取得店：587店（インドネシア：495店、タイ：2店、フィリピン：10店、シンガポール：80店）
7.水使用量の低減	グループ各社の水使用実態の把握	対象会社91社に対して、54社（59%）の水使用実態調査完了	

環境活動を保証する仕組み

	2010年計画	2010年実績
1.グループEMSの構築・運営（ISO14001／ヤマハ自己宣言）	グループEMS活動の見直し実施	ISO14001認証取得：45社 ヤマハ社内規格認証取得：5社
	ヤマハ独自の環境情報ネットワークシステム（G-YECOS）を利用したセルフチェック導入58社	2010年は7社導入し、G-YECOS導入済みは74社
	YHSJ※4と活動を統合し認証を取得	YHSJを4月に統合して11月に拡大審査を受審、認証を取得
	環境監査員の増員、140名体制を確保	監査員の養成のための研修会を2回実施、環境監査員は171名となった（実習生含む）
2.環境リスクマネジメント	リスクの見える化と評価により環境リスクの低減を図る	G-YECOSへの情報登録によって見える化を推進したが登録率が低迷。登録率の向上に今後も努める
3.環境管理支援ツールの整備・運用	改正化管法対応 ME事業本部へのシステム運用拡大	化管法対象物質見直しに伴うシステム対応完了 ME事業本部にて化学物質管理システム4月より運用開始

取り組み姿勢

	2010年計画	2010年実績	
環境 取 組 み 姿 勢	1.エコライフ活動メニュー拡大	エコ通勤者参加率67%	社内イントラや電子メールで従業員の参加意欲を醸成し、エコ通勤者参加率68%を達成 （9事業所が国交省の『エコ通勤優良事業所認証』登録中）
	2.多様なエコ活動の展開・支援	エコポイント制度の定着	申請者190人
	3.環境マインド・教育	階層別教育に「経営層・部長級教育」を導入	10月に外部講師を招き、「経営層・部長級教育」を継続実施
	1.地域共生活動	4万人のV作戦において、ヤマハグループで延べ4万人参加	環境分野で20,500人、社会貢献分野で22,300人。延べ42,800人参加 （3年連続4万人超えを達成）

地域との共生	2. 企業社会貢献活動	地域・学校に対する企業環境取り組み講演の実施	静岡県内2大学、及び愛知県主催セミナーへの企業環境取組講演を実施
		各種研修受け入れを継続	磐田市の中学2校、他の環境研修受け入れ
		地方自治体・研究教育機関・各企業と連携した環境活動の継続	磐田市植林地帯での間伐、浜松市ウェルカムビーチクリーン、湖西市浜名湖クリーン作戦、他社中田島植林などの活動に参加
3. 自然共生活動	生態系モニタリングの研究、準備の実施 アカウミガメの保護	菊川テストコース建設予定地においてモニタリング継続実施中 地域のNPOが進めるアカウミガメの保護活動に協力	
情報の公開	1. 情報公開と対話	地域とのコミュニケーションを目的としたイベントへの参加	当社廃棄物処理の実態に関して、地域自治体と対話集会を実施 地域NPO主催の環境イベントに出展（NPOや地域住民とのコミュニケーション）
	2. 製品・技術・サービスでの環境情報発信	エコプロダクツ展において環境商品の展示 製品の環境情報の提供を推進	環境商品（EC-03、PAS など）を展示 二輪車の車種別環境情報と「3R」設計、二輪車・FRP船・FRPプールリサイクルシステムなどを、ウェブサイト継続的に公開

※1 ヤマハ発動機、ヤマハモーターパワープロダクツ

※2 ヤマハ発動機、ヤマハモーターパワープロダクツ、ヤマハモーターエレクトロニクス

※3 鉛蓄電池再資源化協会の略称

※4 ヤマハモーターハイドロシックスシステム

[地球環境とともに](#) →

[2010年の計画と実績](#) →

[環境マネジメント](#) →

[CO2排出量削減の取り組み](#) →

[環境負荷物質削減の取り組み](#) →

[資源循環や使用量削減の取り組み](#) →

[生物多様性保全の取り組み](#) →

[エコマインドの醸成と環境コミュニケーション](#) →

[グループや各工場の環境データ](#) →

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)

[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)

[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

環境マネジメント

ヤマハ発動機グループの環境活動の推進管理についての情報をご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

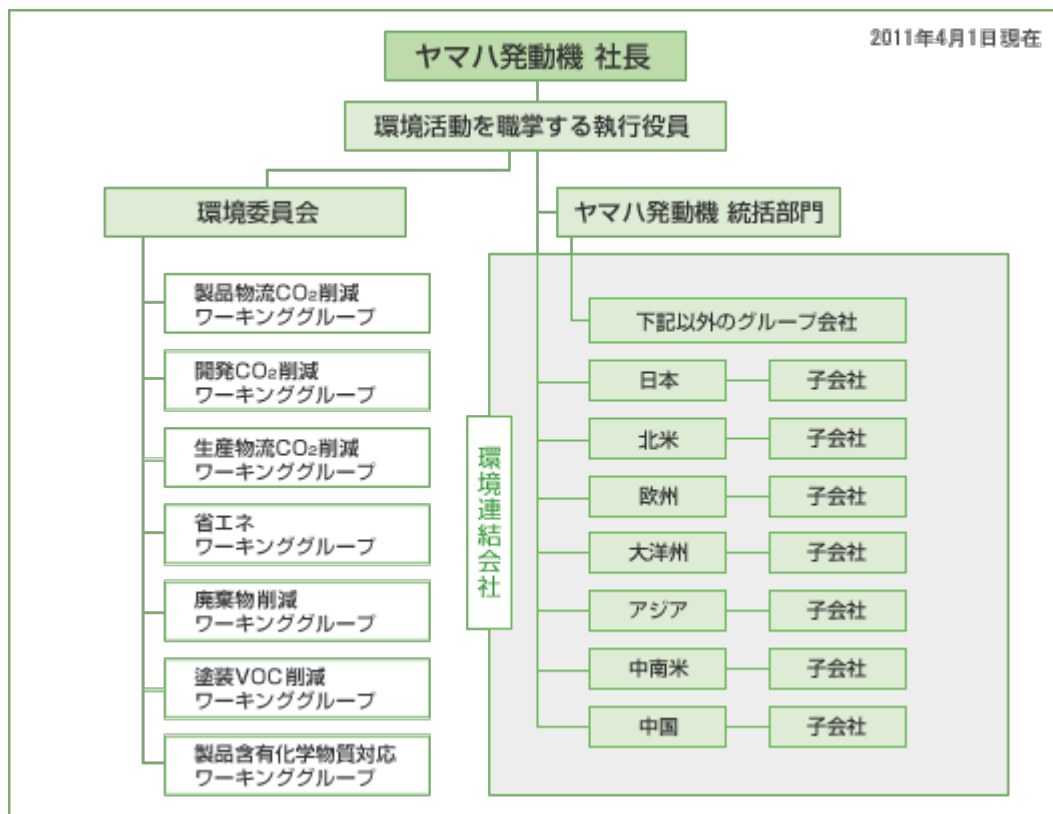
地球環境

環境マネジメント

環境経営を推進する体制

ヤマハ発動機グループでは、環境活動を職掌する執行役員からの諮問を受ける「環境委員会」を国内外における環境活動の中核を担う組織として位置づけています。この委員会が、環境に関わる活動の方針やビジョン、中長期の環境計画、環境保全に関連する戦略投資案件、環境モニタリングに関する事項および課題への対応、そのほか環境経営に関する重要課題についての審議をおこないます。

ヤマハ発動機グループの環境企画・推進組織



環境マネジメントシステム（EMS）

ヤマハ発動機グループ全体で環境活動の促進をはかる環境マネジメントシステム（EMS）については、より効率的・効果的な運用を目的に、各社の事業形態に合わせてシステム構築をするよう、方針の変更を2010年に行っています。

2010年12月末時点のISO14001 認証取得は45社、社内規格YEMCS（ヤマハ発動機グループ環境マネジメント認定制度）の認証取得については5社となっています。



YEMCS環境マネジメント認定証

ヤマハ発動機では安全衛生マネジメントシステムと統合した「統合マネジメントシステム」を2011年4月1日より運用しています。

[「統合マネジメント方針」](#)については[こちら](#)（別ウィンドウでPDFが開きます）

グローバル環境情報ネットワーク（G-YECOS）

ヤマハ発動機グループでは、独自のG-YECOS（グローバル環境情報ネットワークシステム）の展開を進めることによって、環境マネジメントシステムISO14001と環境パフォーマンスに関する情報や、環境活動の事例などの共有をはかり、グループ全体での環境保全活動レベルの向上に努めています。

国内外のグループ会社によるG-YECOS 導入によって、本社とグループ会社の間だけでなく、各グループ会社の間においても、他国の環境法適用の状況や各社の環境リスクモニタリングの結果が把握できるようになり、より効果的な環境活動の推進が可能になってきています。

2010年12月末時点でのG-YECOS 運用は74社となっています。

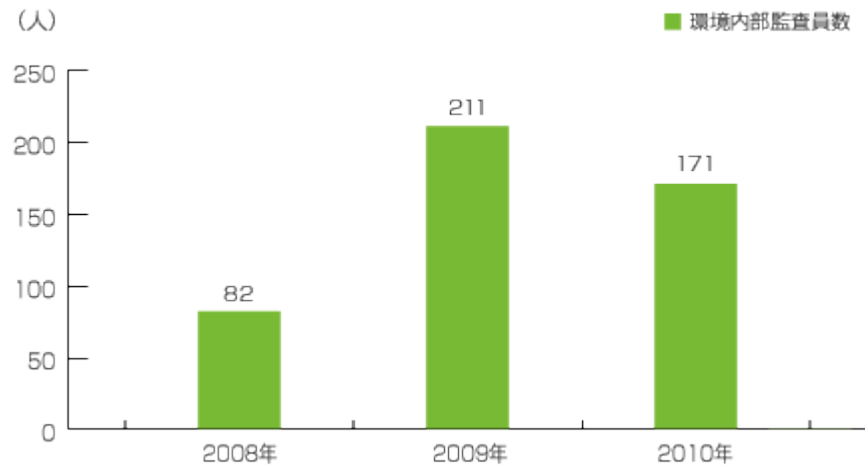
環境内部監査

ヤマハ発動機の環境監査体制は、ISO14001 規格に基づく内部監査員が実施する「環境内部監査」と「外部審査」で構築されています。2010年度の環境内部監査員数は171名となりました。下期に開催したスキルアップ教育には実習生から経験豊富な監査員まで総勢100人が参加、6月から7月にかけて実施した内部監査における実際の指摘事例を題材に、指摘レベルの共有化をはかりました。今後も定期的に監査員のスキルアップをはかり、より効率的・効果的な環境監査を目指します。



養成研修での外部講師による講義

環境内部監査員数の推移



※2009年の監査員数は、旧ヤマハマリンとISO組織統合による内部監査員80名、監査員養成研修の合格者実習生41名を含む。

環境経営のコスト

ヤマハ発動機では、環境保全活動の定量的な情報開示を行うとともに、より効果的な環境経営を進めるために、環境省による「環境会計ガイドライン（2005年度版）」を参考に、環境対応コストとコストに相応する効果を算出しています。

2010年の環境対応コストは設備投資と経費を合わせて約87億円となり、前年度比で約14%の増加となりました。内訳としては、地球環境保全コスト・資源循環コスト・管理活動コスト・研究開発コストが増加し、その他については減少となっています。

※環境会計算出範囲は、YMC + 製造1社です。

2010年度における環境対応コストとその経済効果

分類	内容	環境対応コスト			経済効果	
		投資	経費	合計	年度内	通年換算
事業エリア内	公害防止コスト	73	515	588	30	31
	地球環境保全コスト	103	130	233	48	80
	資源循環コスト	3	524	527	33	37
小計		179	1,169	1,348	111	148
上流・下流コスト	廃船リサイクルシステム運営 欧州向けの梱包資材削減 グリーン購入、エコ通勤手当	0	151	151	1	306
管理活動コスト	環境ISO運営、環境スタッフ人件費	15	439	454	5	5
研究開発コスト	エコパワーユニット開発、軽量素材開発、環境製品の先行開発	232	6,540	6,771	0	0
社会活動コスト	ビーチクリーン作戦・子ガメ放流会などのイベント、緑化管理	0	4	4	0	0
環境損傷対応コスト	土壌汚染浄化	0	10	10	0	0
合計		425	8,312	8,738	117	459

(単位：百万円) 注) 小数点以下は四捨五入しているため、積算と合計が一致しない箇所があります。

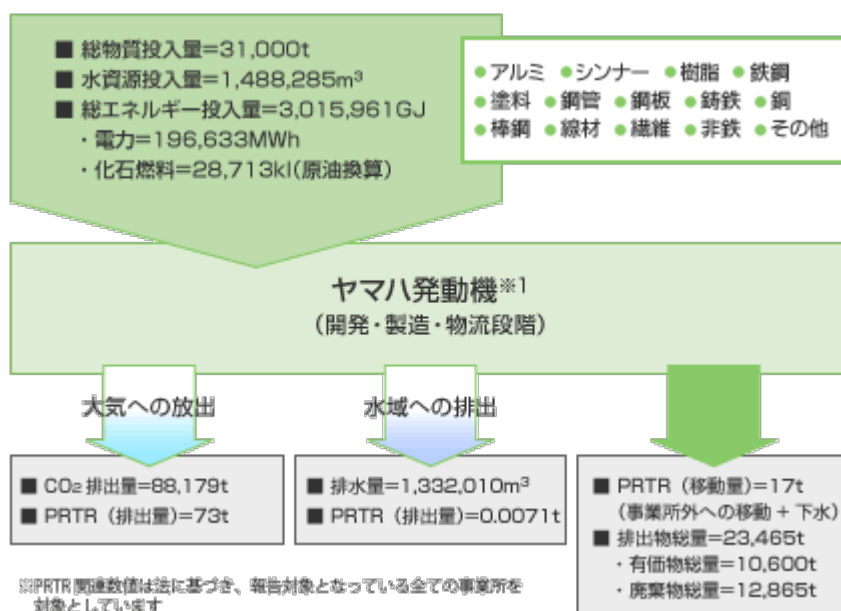
環境保全効果		
分類	年度内	通年換算
削減エネルギー (GJ)	28,001	197,502
CO2低減 (t - CO2)	1,145	2,382
節水量 (t)	413	1,257
削減廃棄物 (t)	295	529
削減VOC (t)	40	40

環境保全効果は、全て対応コストに対応する推定効果の集計

- 削減エネルギー：電力、石油類、ガス類の削減効果をエネルギー換算
- CO2削減効果：エネルギー起源CO2の削減効果

- 研究開発コスト：販売前提の製品開発は含みません
- 経済効果：「リスク回避」「企業イメージ向上」などのみなし効果については対象としていません
- キャッシュフローをベースに算出しており、減価償却費や積立金などは含まれていません

事業活動と環境負荷



地球環境とともに →

2010年の計画と実績 →

環境マネジメント →

CO2排出量削減の取り組み →

環境負荷物質削減の取り組み →

資源循環や使用量削減の取り組み →

生物多様性保全の取り組み →

エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →

グループや各工場の環境データ →

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR \(企業の社会的責任\)](#) > [地球環境](#) > [CO2 排出量削減の取り組み](#)

CO2 排出量削減の取り組み

CO2 排出量削減のための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2 排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP 小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRP プール エコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

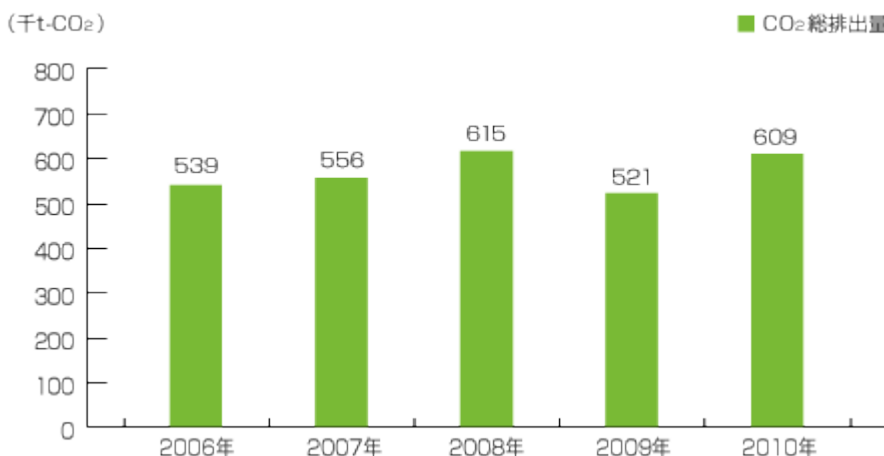
CO₂ 排出量削減の取り組み

ヤマハ発動機グループは、二輪車を中心とした輸送機器メーカーであり、温室効果ガスの削減を環境分野における最重要課題として取り組みを進めています。グループ共通の2010年目標としては、「CO₂ 原単位削減30% (1990年度比)」を設定し、製品の開発から製造、使用、廃棄にいたるライフサイクル全体での取り組みを中心に、事業活動全般における温室効果ガスの削減を進めています。

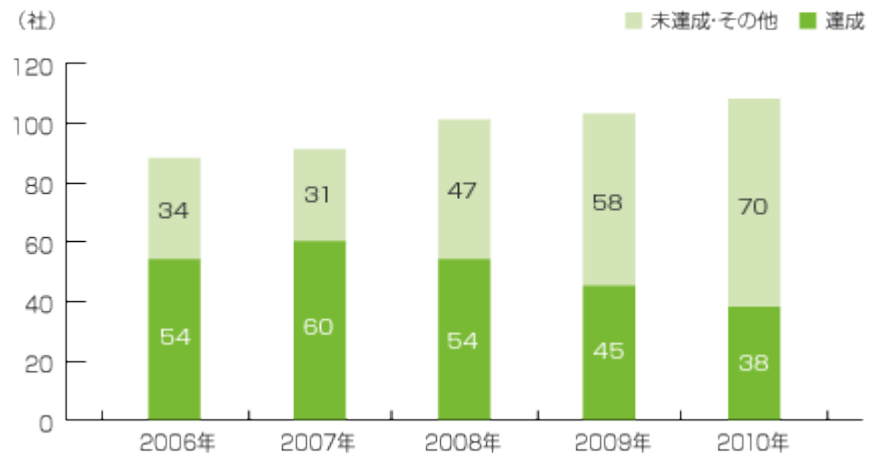
各事業所においては、「売上高原単位あたり年1.5%のCO₂ 排出量削減」を目標に活動を展開しており、2010年には、環境連結会社108社のうち、グループ共通目標を達成した会社は38社 (35%) となりました。CO₂ 排出量では、2009年の521千t-CO₂に対し2010年は609千t-CO₂と88千t-CO₂の増加となりました。

今後も、国内・海外のグループ会社によるエネルギー使用量削減に向けた活動状況のモニタリングと、進捗の遅い会社に対する支援を行うなど、効率的な温室効果ガス削減に取り組んでいきます。

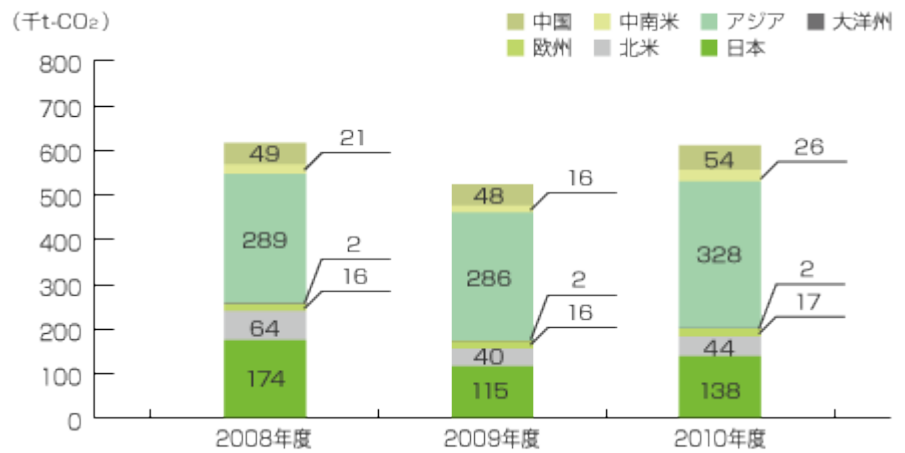
ヤマハ発動機グループ CO₂ 排出量の推移 (2010 年環境連結108 社)



ヤマハ発動機グループ CO2 排出量売上高原単位 目標達成会社数推移



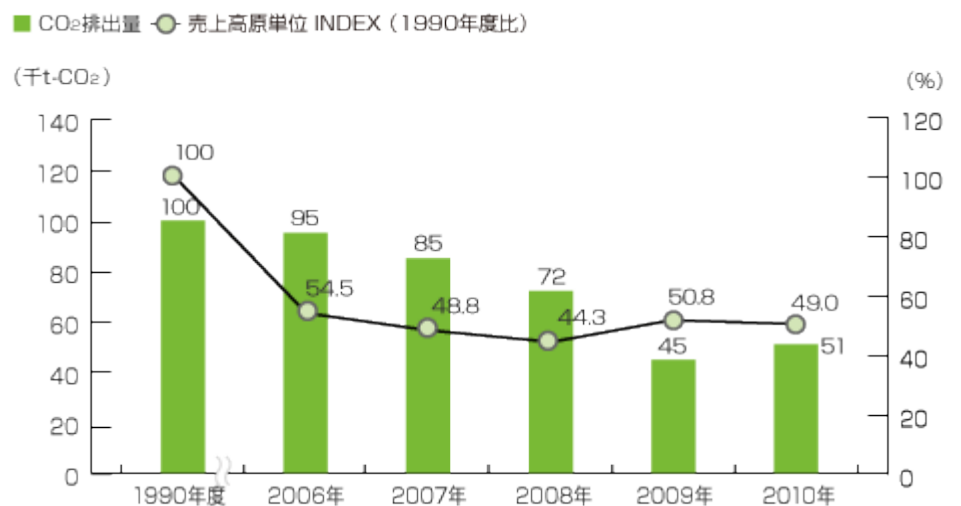
地域別CO2 排出量の推移



製造段階におけるCO2 排出量削減

ヤマハ発動機の全社製造枠での2010年目標は73,940t-CO₂（1990年比26%減）に設定していましたが、50,848t-CO₂（同49%削減）となりました。また、太陽光発電と天然ガスコージェネレーションなどの新エネルギーの利用量は42,148MWh（全使用電力の21.4%）で、CO₂削減量は13,065t-CO₂（火力換算）となっています。今後も引き続き、省エネ設備の導入や運用管理の徹底と改善を進めていきます。

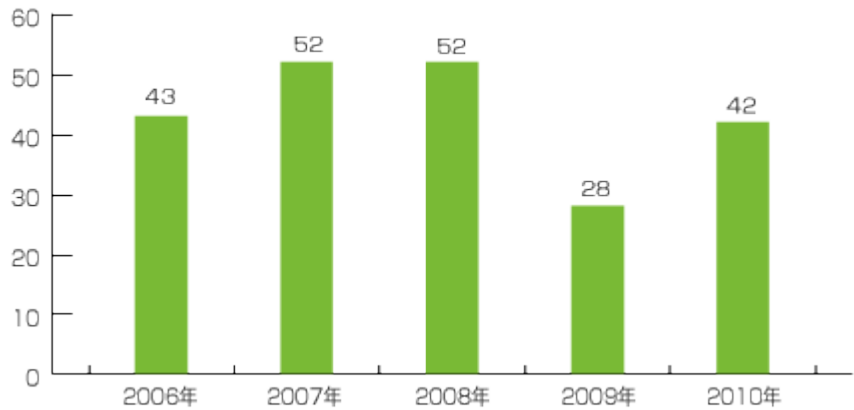
ヤマハ発動機の製造段階におけるCO2 排出量と売上高原単位の推移 (事務・技術部門は除く)



※旧ヤマハマリン（2009年1月にヤマハ発動機に合併）を含む

ヤマハ発動機の新エネルギー※利用量の推移

(千MWh)



※集計対象：新エネ法で定義されている太陽光発電と天然ガスコージェネレーション

※2009年については、生産量減少で電力の需要全体が減少したことによって新エネルギー利用量も減少

新エネルギーによる発電システムを工場に導入

ヤマハ発動機では太陽光や風力による発電システムを導入しています。2008年に当社初となる太陽光発電と風力発電の同時稼働システムを導入した中瀬工場（二輪車の外装部品の成形・塗装など）の2010年の発電量は年間419MWh（約289トンのCO2削減効果）となっており、同工場の事務所の照明や空調などに使用されています。



NEDO との共同研究事業として導入した太陽光発電システム（中瀬工場）



プロペラ型に比べ、静粛性に優れた縦型風力発電システム（中瀬工場）



浜松IM事業所



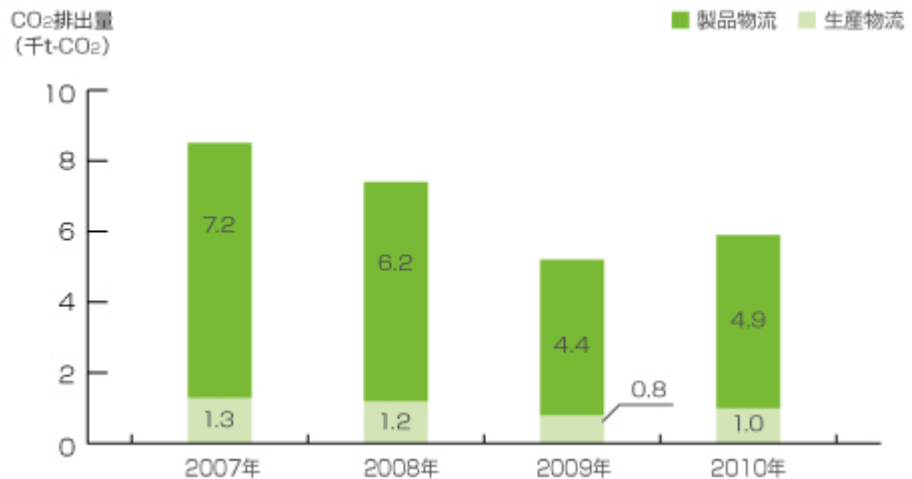
森町工場

物流段階におけるCO2 排出量削減

ヤマハ発動機の各部門の物流におけるCO2削減については、2011年まで「輸送効率を年あたり平均1%削減（2007年を基準として）」という目標を掲げています。省エネ効果とコスト効果の両立をはかりながら削減効果が高いものから実施することを基本方針に、物流におけるCO2削減を統合的に進めるワーキンググループを設置して取り組みを進めています。

2010年は生産量の回復によりCO2排出量は増加となりましたが、輸送効率は2009年に対し9%の改善となっています。今後も物流方法の見直し、関係部門の活動内容の共有化などの施策を継続して行っています。

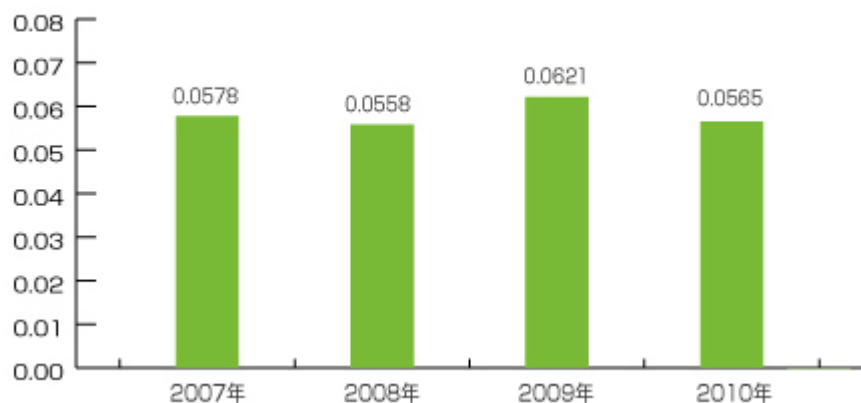
ヤマハ発動機の物流CO2 排出量



※2010年度の集計の際の再検証により、CO₂排出量については2009年の数値を修正しています。

ヤマハ発動機の輸送効率

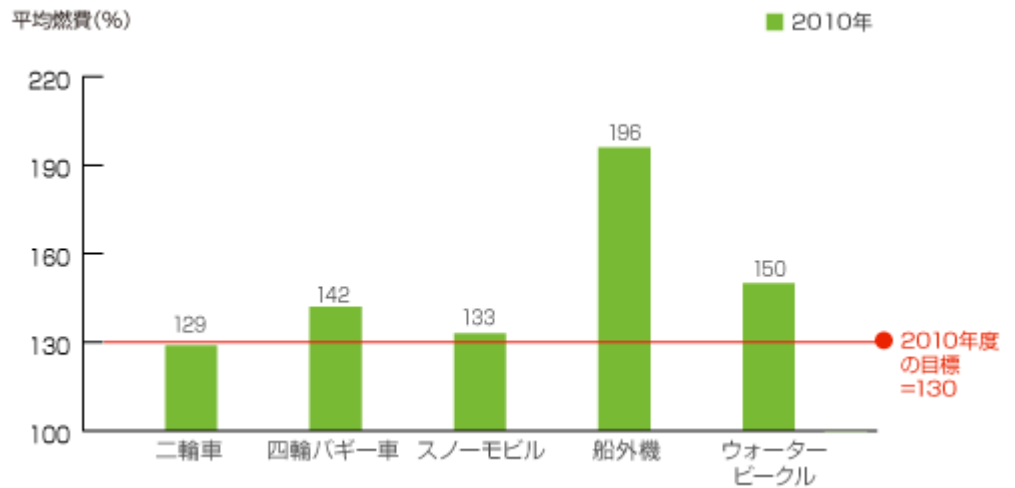
原単位k_e / トンキロ※



※1tのものを1km運ぶために必要な燃料エネルギーを原油換算した原単位

製品におけるCO2 排出量削減

ヤマハ発動機グループの製品には、開発・生産・使用・廃棄というプロセスのなかで使用段階におけるCO₂排出が特に大きいという特徴があり、製品のライフサイクル全体での負荷を総合的に考え、使用中のCO₂の削減につながる取り組みを積極的に進めています。ガソリンエンジンなどの内燃機関を採用した製品のCO₂削減策としては、全製品を対象に平均燃費を2010年までに30%削減することを目標にしており、燃費を向上させたモデルのラインアップが進んだことなどで、一部製品を除き目標を達成することができています。今後も引き続き、2010年2月に発表した新中期経営計画（2010年から2012年の3ヶ年で実施）にそって、製品の燃費向上によるCO₂削減に取り組んでいきます。



※二輪車は1995年比、四輪バギー車・スノーモビルは2000年比、船外機・ウォータービークルは1998年比（基準年：100）

新動力源「スマートパワー」による乗り物の開発

ヤマハ発動機は、電動二輪車初の量産モデルとなった「Passol（パッソル）」を2002年に発売し、続く2005年には性能を高めたモーターや、エネルギー密度を高めたバッテリーを採用することで走

行距離を伸ばした「Passol-L」や「EC-02（イーシーゼロツー）」を発売するなど、都市部での次世代交通インフラの一翼を担うミニマムコミューターの普及に取り組んでいます。

2010年10月には、電動二輪車「EC-03（イーシーゼロスリー）」の全国販売を新たに開始しており、電動アシスト自転車「PAS（パス）」などで培った制御技術や静粛性、滑らかな走行感覚、手軽さや環境に配慮した商品性などが支持されて、都市での短距離移動だけでなく観光地やリゾート施設でも使われ始めています。

ここ数年、普及が進む電動アシスト自転車については、2010年5月に幼児2人同乗用自転車としての安全基準を満たした「PAS Raffini（ラフィーニ）」を新たに発売するなど、さまざまな要望や用途に対応するラインアップ拡充に取り組んでいます。



幼児2名と同乗した場合を考慮した安全基準を満たしたPAS Raffini（パスラフィーニ）

地球環境とともに →

2010年の計画と実績 →

環境マネジメント →

CO2 排出量削減の取り組み →

環境負荷物質削減の取り組み →

資源循環や使用量削減の取り組み →

生物多様性保全の取り組み →

エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →

グループや各工場の環境データ →

環境負荷物質削減の取り組み

環境負荷物質削減のための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2 排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP 小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRP プール エコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

環境負荷物質削減の取り組み

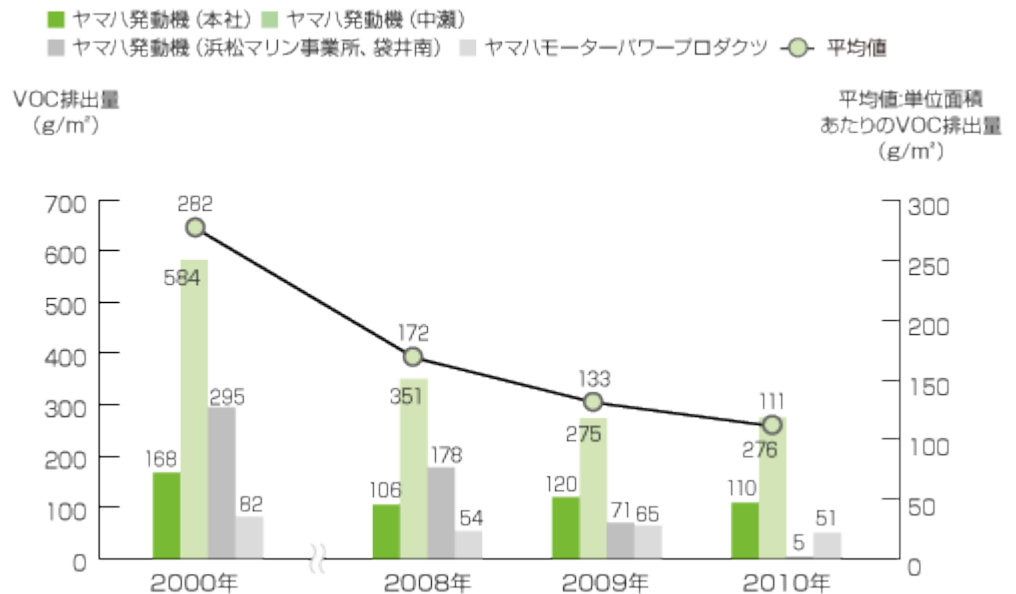
PRTR 制度報告対象物質の削減

ヤマハ発動機グループでは、人体や環境にとって有害となる化学物質の、排出物や廃棄物などへの含有量について、各国の規制に準じて把握・報告を行っています。また、ヤマハ発動機が排出するPRTR 制度報告対象物質の99%以上はVOC となっており、そのほとんどは塗装工程に関わるものです。

2010年は2009年から袋井南工場にて稼動している蓄熱燃焼式排ガス浄化装置（RTO）の効果等により、原単位111g/m²（グループ平均）、2000年比60.8%の削減となり、前年度に続き2010年までの目標としていた50%削減を上回ることができました。

ヤマハ発動機グループではVOC の含有が少ない塗料の採用拡大や、塗着効率の改善、廃塗料の削減を今後も引き続き推進していきます。

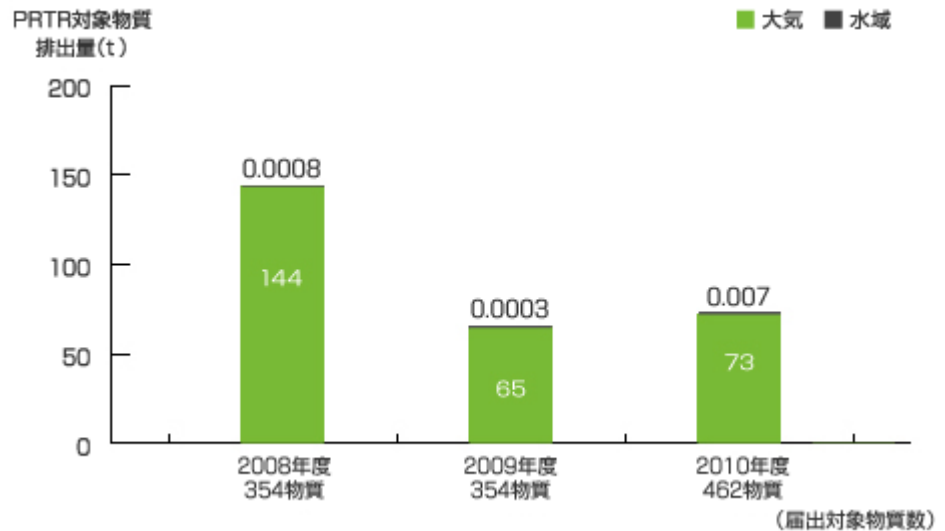
VOC 排出量の推移



※PRTR : Pollutant Release and Transfer Register (環境汚染物質排出・移動登録)

※VOC : Volatile Organic Compounds (揮発性有機化合物)

ヤマハ発動機のPRTR 対象物質排出量の推移



※排出量については各事業所ごとに届出した数値を集計したものです。

※今回の報告から全ての年度の集計期間を自治体への報告と同じ4月～3月に統一しています。

※2010年度よりPRTR 届出対象物質が354物質から462物質に変更されています。

REACH 規制対応

欧州での化学物質の登録・評価・認可および制限に関する規則(REACH) が2007年6月に制定されたことを受け、ヤマハ発動機グループでは化学物質の管理を強化しています。2008年には対象となる物質の予備登録を完了しており、2010年には2011年の届出に向けて欧州向けの製品に含有される化学物質の調査を進めました。今後もサプライチェーン全体での情報共有を図るとともに、化学物質の管理強化に努めていきます。

[地球環境とともに →](#)

[2010 年の計画と実績 →](#)

[環境マネジメント →](#)

[CO2 排出量削減の取り組み →](#)

[環境負荷物質削減の取り組み →](#)

[資源循環や使用量削減の取り組み →](#)

[生物多様性保全の取り組み →](#)

[エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →](#)

[グループや各工場の環境データ →](#)

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

資源循環や使用量削減の取り組み

リサイクルや資源の使用量を抑制するための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2 排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP 小型船舶リサイクルシステム
- 関連リンク:
- ▶ バイク・スクーター車種別環境情報
- ▶ FRP プール エコリニューアル
- ▶ バイオマスプラスチック製梱包材について

地球環境

資源循環や使用量削減の取り組み

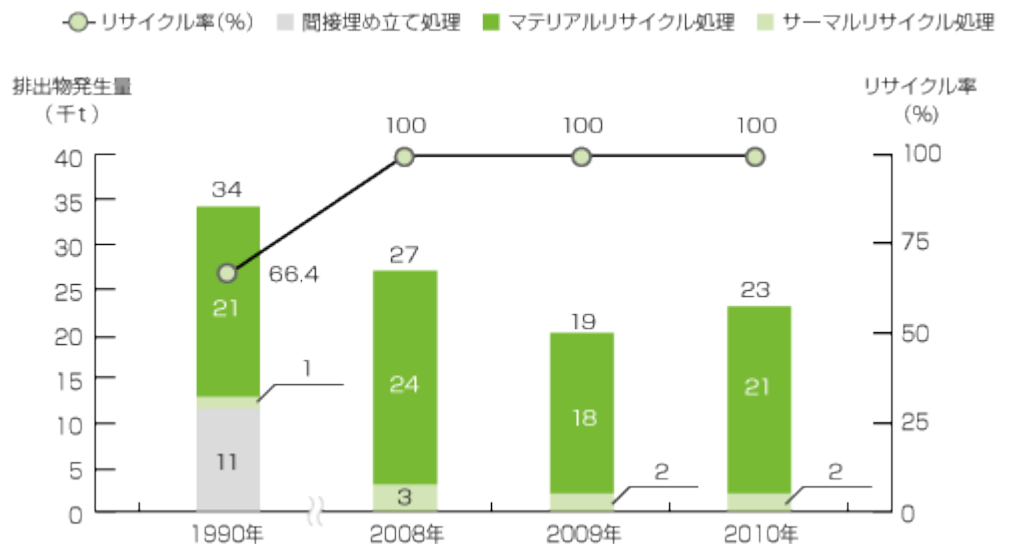
循環型社会の実現に向け、製品の開発、生産、使用、廃棄の各段階で「3R（リデュース、リユース、リサイクル）」の重要度はさらに高まっています。ヤマハ発動機グループでは、「製品・工場：リサイクル100%」「ロングライフの達成」を2010年目標として掲げ、さまざまな取り組みを行っています。

また、燃費向上にもつながる軽量化のために、各部の小型化をはじめ、マグネシウムやアルミニウム、樹脂部品の拡大、部品点数の削減、最適形状の追求による薄肉化など、さまざまなアプローチで取り組んでいます。さらに、部品リサイクル性などのデータ集計システムの運用を高めるなど、製品3Rの向上に取り組んでいきます。

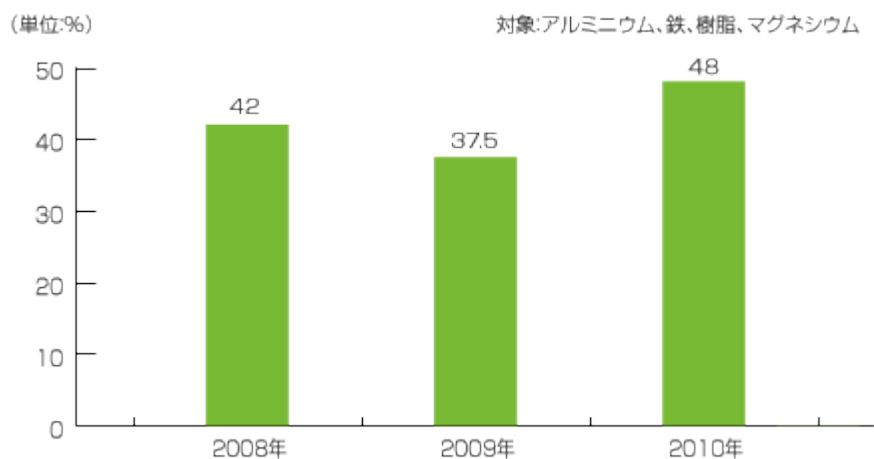
製造段階における廃棄物削減と資源保護の取り組み

ヤマハ発動機の2010年度の排出物総量は、23,465tとなりました。排出物はマテリアルリサイクル処理と、社内の廃棄物焼却処理施設（ACEP）によるサーマルリサイクルにより適正処理されており、廃棄物の直接および間接埋立量については「0トン」を継続して達成しています（リサイクル率100%）。また、2007年を基準として年平均1%（2010年に3%）の削減目標を掲げていた排出物の売上原単位については2%の削減となっています。

ヤマハ発動機の製造段階における排出物発生量・リサイクル率の推移



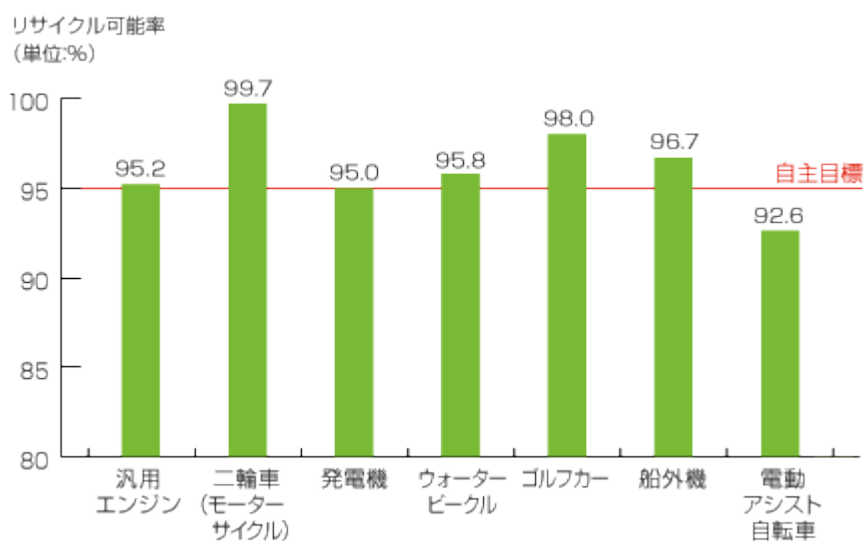
ヤマハ発動機の購入材料における再生材割合



3R 設計と製品リサイクルの推進

ヤマハ発動機グループでは、各種製品の3R（リデュース、リユース、リサイクル）設計に積極的に取り組んでいます。また日本国内に関しては、廃棄二輪車の取扱店が適正に処理を行う「二輪車リサイクルシステム」を業界他社との協力・連携をとりながら継続して推進しています。

2010 年度の製品別リサイクル可能率



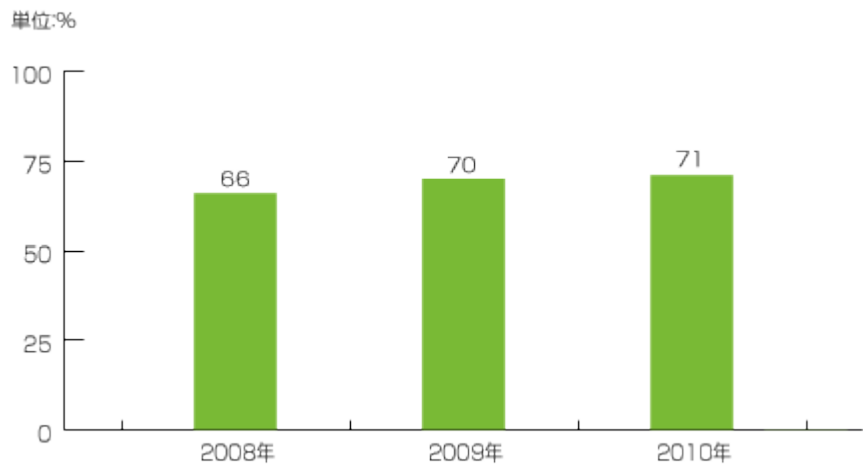
製品における3Rの事例（2010年発売モデル）



補修部品の物流における3Rの取り組み

輸送用コンテナにおける抱き合わせ梱包化（充填率の向上によるリデュース）、中南米センターの稼働によるリターナブルパレット採用地域の拡大（リターナブル率向上におけるリユース）、事業所より排出される樹脂を再利用したリターナブルパレットの製作（事務所内廃材のリサイクル）など、部品物流における資源循環や省資源化に努めています。ヤマハ発動機の輸出用コンテナのリターナブル率については、前年度の70%に対し2010年は71%に向上しています。

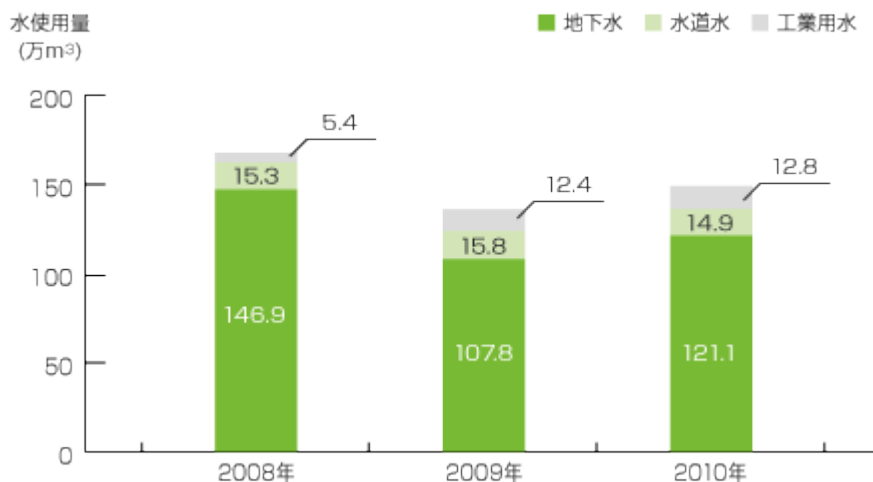
ヤマハ発動機の部品梱包容器の海外出荷リターナブル率



水資源の保護

ヤマハ発動機グループでは、水資源の保護をグループ共通の課題として取り組んでおり、水使用の実態調査に関する運用面での仕組み改善についてもグローバルに進めています。

ヤマハ発動機の水使用量の推移



[地球環境とともに →](#)

[2010年の計画と実績 →](#)

[環境マネジメント →](#)

[CO2 排出量削減の取り組み →](#)

[環境負荷物質削減の取り組み →](#)

[資源循環や使用量削減の取り組み →](#)

[生物多様性保全の取り組み →](#)

[エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →](#)

[グループや各工場の環境データ →](#)

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問い合わせ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [地球環境](#) > [生物多様性保全の取り組み](#)

生物多様性保全の取り組み

事業活動における生物多様性の保全への取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

生物多様性保全の取り組み

ヤマハ発動機では、静岡県菊川市で着工を予定しているテストコース建設用区域（489,101m²）およびその周辺において、四季を通じた1年間の環境評価を2008年に実施しました。翌2009年はその結果のまとめとともに、静岡県レッドデータブック掲載種（カテゴリー：絶滅危惧II類、準絶滅危惧）のうち、確認された植物（6種）、哺乳類（1種）、鳥類（4種）、魚類（1種）などの保全計画となる「自然環境保全協定書」を作成し、2010年に静岡県くらし・環境部環境局自然保護課へ提出するとともに、継続的にモニタリングを実施しています。また、造成期間中には周辺地域に対する大気汚染、騒音、振動、水質汚濁、土壌汚染の予測、および周辺の生態系などへの影響を評価し、工事においては極力低減する工夫を行う方針です。



タコノアシ準絶滅危惧（環境省レッドリスト）

ビーチクリーン&子ガメ放流会

2010年9月、今回で20回目となる、アカウミガメの保護を目的とする、毎年恒例のイベント中田島ビーチクリーン作戦と子ガメの放流会を実施しました。グループ会社の社員やその家族の参加で、一会場では過去最高の約800名の参加があり、海岸清掃作業など実施し、ビニール、ビンや缶など160kgを回収しました。2010年から地元NPOの新たな活動として始まった、砂浜回復のために窪地へ砂とコウボウ麦の種入りの麻袋を利用した土のうを積む作業にも協力しました。



参加者への説明



土のう積み作業

[地球環境とともに →](#)

[2010年の計画と実績 →](#)

[環境マネジメント →](#)

[CO2排出量削減の取り組み →](#)

[環境負荷物質削減の取り組み →](#)

[資源循環や使用量削減の取り組み →](#)

[生物多様性保全の取り組み →](#)

[エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →](#)

[グループや各工場の環境データ →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) 2008 Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved.

エコマインドの醸成と環境コミュニケーション

環境に対する意識向上や活動促進のための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2010年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

エコマインド醸成と環境コミュニケーション

ヤマハ発動機グループでは、持続可能な社会実現と地球環境との共存をはかるうえで、製品・サービスの提供という事業活動において環境保全活動を推進することだけでなく、ステークホルダーの皆さまの理解・参加を得ながら連携を深めていくことも重要であると考えています。また、環境保全活動への取り組みについて説明責任を果たすことも企業の社会的責任の一つであると認識しています。

2010年までの「ヤマハ発動機グループ環境計画2010」では、「企業市民として地域から信頼され、敬愛を受ける」ことを目標として掲げ、外部からの要請に対応した、環境関連の当社の取り組み(エコ通勤やビーチクリーン&子ガメの放流会)についての講演や、CSRレポートなどを通じた情報発信を行うことで、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを深めています。

また、2004年から実施しているエコ通勤活動については、継続的な取り組みが評価され、国土交通省が制定するエコ通勤優良事業所認証制度の初年度（2009年）に9事業所が登録されており、2010年も継続して、エコ通勤活動に取り組みました。



エコ通勤に関する講演会



エコ通勤優良事業所認証制度の登録証

エコポイント制度の導入

「ヤマハ発動機グループ環境計画2010」での環境取り組み姿勢における目標は「グループ全員が高い目標意識で環境取り組みを積極的に行っている」となっています。ヤマハ発動機ではその支援策として2008年1月にエコポイント制度を導入しています。この制度は、エコ活動をポイント化する指標を設定し、年間ポイントの獲得と活動項目数に応じて、エコ賞品が選べる仕組みになっており、2010年度の申請実績は190名となっています。

イントラネットを活用したエコマインドの醸成

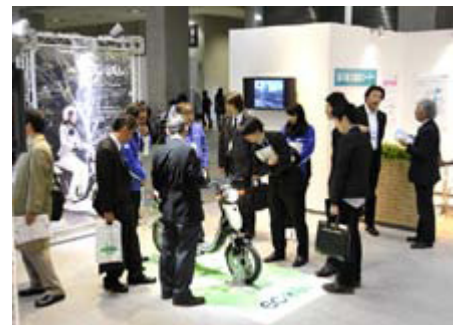
ヤマハ発動機のイントラネットでは、エコ通勤活動やボランティア活動への参加状況の報告をはじめ、ビーチや会社施設周辺などを対象にしたクリーン作戦、近隣地域・社会での環境コミュニケーション活動についての報告をタイムリーに情報発信しており、従業員の環境に対する意識向上や参加意欲の醸成に取り組んでいます。



社員が参加した海岸清掃活動

エコプロダクツ出展

2010年12月に開催された日本最大級の環境関連の展示会「エコプロダクツ2010」では、ヤマハ発動機は“移動手段を見直してヒトと地球の元気を取り戻そう”をテーマに、電動アシスト自転車「PAS」と電気自動車「EC-03」を出展しました。



エコプロダクツ2010

[地球環境とともに →](#)

[2010年の計画と実績 →](#)

[環境マネジメント →](#)

[CO2排出量削減の取り組み →](#)

[環境負荷物質削減の取り組み →](#)

[資源循環や使用量削減の取り組み →](#)

[生物多様性保全の取り組み →](#)

[エコマインドの醸成と環境コミュニケーション →](#)

[グループや各工場の環境データ →](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

CSR情報の開示について

CSRレポート2011に記載した情報の編集方針や対象となる期間などについてご説明します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

- ▶ [CSRレポート2011についてのアンケート](#)

CSR情報の開示について

ヤマハ発動機ではグループのCSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）の考え方や取り組みをまとめた「CSRレポート」の発行を通じて、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを深めるとともに、社会に報告する情報や内容の充実を図ってきました。

「CSRレポート2011」の作成にあたっては、ヤマハ発動機グループのCSRに関するさまざまな取り組みを、「社会にとっての重要性」「当社にとっての重要性」の観点から整理するとともに、ステークホルダーの皆さまへの開示における適性、環境負荷の低減などを総合的に考慮して、WEBサイトでの開示のみとしています。



- **参考にしたガイドライン：** グローバル・リポーティング・イニシアティブ（GRI）の「サステナビリティ・リポーティング・ガイドライン第3版（G3）」、環境省の「環境報告ガイドライン2007年版」等を参考にしています。
- **対象範囲：** ヤマハ発動機株式会社および連結対象会社（一部、関係会社を含む）からなるヤマハ発動機グループを対象としています。異なる場合には対象範囲を明記しています。
- **記事中の社名表記：** ヤマハ発動機株式会社についてはヤマハ発動機（一部のグラフ等では略称のYMCを使用）、連結子会社（一部、関係会社も含む）のうち、国内は日本語表記の社名、海外は英語表記の社名の略称としています。
- **対象期間：** 2010年1月～2010年12月（一部、前後の期間についての報告含む）
- **前回レポート発行：** 2010年6月
- **次回レポート発行：** 2012年6月頃の予定

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域・社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)



[ホーム](#) > [企業情報・CSR 情報](#) > [CSR \(企業の社会的責任\)](#) > [GRI ガイドライン対照表](#)

GRI ガイドライン対照表

CSR レポート2011で開示している情報のGRI ガイドラインとの対照表です。

CSR (企業の社会的責任) :

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR 関連のお知らせ](#)
- ▶ [2010年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSR の考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域・社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR 情報の開示について](#)
- ▶ [GRI ガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSR レポート2011についてのアンケート](#)

GRIガイドライン対照表

項目	指標	WEB ページ
1. 戦略および分析		
1.1	組織にとっての持続可能性の適合性とその戦略に関する組織の最高意思決定者（CEO、会長またはそれに相当する上級幹部）の声明	トップメッセージ
1.2	主要な影響、リスクおよび機会の説明	CSR の考え方

項目	指標	WEB ページ
2. 組織のプロフィール		
2.1	組織の名称	(企業概要)
2.2	主要なブランド、製品および/またはサービス	(企業概要)
2.3	主要部署、事業会社、子会社および共同事業などの、組織の経営構造	(企業概要)
2.4	組織の本社の所在地	(企業概要)
2.5	組織が事業展開している国の数および大規模な事業展開を行っている、あるいは報告書中に掲載されているサステナビリティの課題に特に関連のある国名	(グループ企業)
2.6	所有形態の性質および法的形式	(企業概要)
2.7	参入市場（地理的内訳、参入セクター、顧客/受益者の種類を含む）	(企業概要)
2.8	以下の項目を含む報告組織の規模 <ul style="list-style-type: none"> ・ 従業員数 ・ 純売上高（民間組織について）あるいは純収入（公的組織について） ・ 負債および株主資本に区分した総資本（民間組織について） ・ 提供する製品またはサービスの量 	(企業概要)
2.9	以下の項目を含む、規模、構造または所有形態に関して報告期間中に生じた大幅な変更 <ul style="list-style-type: none"> ・ 施設のオープン、閉鎖および拡張などを含む所在地または運営の変更 ・ 株式資本構造およびその資本形成における維持および変更業務（民間組織の場合） 	(沿革)
2.10	報告期間中の受賞歴	製品開発とモノ創り

項目	指標	WEB ページ
3. 報告要素		
3.1	提供する情報の報告期間（会計年度/暦年など）	CSR 情報の開示について
3.2	前回の報告書発行日（該当する場合）	CSR 情報の開示について

3.3	報告サイクル（年次、隔年など）	CSR情報の開示について
3.4	報告書またはその内容に関する質問の窓口	（お問い合わせ）
3.5	以下の内容を含め、報告書の内容を確定するためのプロセス <ul style="list-style-type: none"> 重要性の判断 報告書内のテーマの優先付け 組織が報告書の利用を期待するステークホルダーの特定 	CSR情報の開示について
3.6	報告書のバウンダリー（国、部署、子会社、リース施設、共同事業、サプライヤーなど） ※詳細はGRIバウンダリー・プロトコルを参照のこと	CSR情報の開示について
3.7	報告書のスコープまたはバウンダリーに関する具体的な制限事項	CSR情報の開示について
3.8	共同事業、子会社、リース施設、アウトソーシングしている業務および時系列での、および／または報告組織間の比較可能性に大幅な影響を与える可能性があるその他の事業体に関する報告の説明	（企業概要）
3.9	報告書内の指標およびその他の情報を編集するために適用された推計の基となる前提条件および技法を含む、データ測定技法および計算の基盤	グループや各工場の実績データ
3.10	以前の報告書で掲載済みである情報を再度記載することの効果の説明、およびそのような再記述を行う理由（合併／買収、基本となる年／期間、事業の性質、測定方法の変更など）	該当しない
3.11	報告書に適用されているスコープ、バウンダリーまたは測定方法における前回の報告期間からの大幅な変更	該当しない
3.12	報告書内の標準開示の所在場所を示す表 以下の項目を検索できるように、ページ番号またはWEBリンクを明らかにする。 <ul style="list-style-type: none"> 戦略および分析 1.1～1.2 組織のプロフィール 2.1～2.10 報告要素 3.1～3.13 ガバナンス、コミットメントおよび参画 4.1～4.17 カテゴリーごとのマネジメント・アプローチの開示 中核パフォーマンス指標 盛り込まれているGRIの追加指標 報告書に盛り込まれているGRIの業種別補足文書の指標 	本表

項目	指標	WEBページ
4. ガバナンス、コミットメント、および参画		
4.1	戦略の設定または全組織的監督など、特別な業務を担当する最高統治機関の下にある委員会を含む統治構造（ガバナンスの構造）	（コーポレート・ガバナンス）
4.2	最高統治機関の長が執行役員を兼ねているかどうかを示す（兼ねている場合は、組織の経営におけるその役割と、このような人事になっている理由も示す）	（コーポレート・ガバナンス）
4.3	単一の理事会構造を有する組織の場合は、最高統治機関における社外メンバーおよび／または非執行メンバーの人数を明記	（コーポレート・ガバナンス）
4.4	株主および従業員が最高統治機関に対して提案または指示を提供するためのメカニズム 以下のプロセスへの参照を盛り込む <ul style="list-style-type: none"> 少数株主が最高統治機関に意見を表明するための株主決議またはその他のメカニズムの利用 組織レベルの「労使協議会」などの正式な代表組織および最高統治機関内の従業員代表との、職務上の関係についての従業員への通知および協議 	（コーポレート・ガバナンス）
4.5	最高統治機関メンバー、上級管理職および執行役についての報酬（退任の取り決めを含む）と組織のパフォーマンス（社会的および環境的パフォーマンスを含む）との関係	（コーポレート・ガバナンス）

4.6	最高統治機関が利害相反問題の回避を確保するために実施されているプロセス	(コーポレート・ガバナンス)
4.7	経済、環境および社会的パフォーマンスに関連する課題を含め、組織の戦略を導くために、最高統治機関のメンバーに求められる適性および専門性を決定するためのプロセス	(コーポレート・ガバナンス)
4.8	経済的、環境的、社会的パフォーマンス、さらにその実践状況に関して、組織内で開発したミッション（使命）およびバリュー（価値）についての声明、行動規範および原則 以下の項目についての程度を説明する <ul style="list-style-type: none"> 組織全体を通じて、異なる地域および部署／ユニットでどの程度適用されているか 国際的に合意された基準にどの程度関連しているか 	CSRの考え方
4.9	組織が経済的、環境的、社会的パフォーマンスを特定し、マネジメントしていることを最高統治機関が監督するためのプロセス。関連のあるリスクと機会を特定かつマネジメントしていること、さらに国際的に合意された基準、行動規範および原則への支持または遵守を含む	CSRの考え方
4.10	最高統治機関のパフォーマンスを、特に経済的、環境的、社会的パフォーマンスという観点で評価するためのプロセス	CSRの考え方
4.11	組織が予防的アプローチまたは原則に取り組んでいるかどうか、およびその方法はどのようなものかについての説明	CSRの考え方
4.12	外部で開発された、経済的、環境的、社会的憲章、原則あるいは組織が同意または受諾するその他のイニシアティブ	取引先
4.13	以下の項目に該当するような、（企業団体などの）団体および／または国内外の提言機関における会員資格 <ul style="list-style-type: none"> 統治機関内に役職を持っている プロジェクトまたは委員会に参加している 通常の会員資格の義務を超える実質的な資金提供を行っている 会員資格を戦略的なものとして捉えている 	2010年活動クローズアップ
4.14	組織に参画したステークホルダー・グループのリスト	CSR基本方針
4.15	参画してもらうステークホルダーの特定および選定の基準	CSR基本方針
4.16	種類ごとの、およびステークホルダー・グループごとの参画の頻度など、ステークホルダー参画へのアプローチ	CSR基本方針
4.17	ステークホルダー参画を通じて浮かび上がった主要な課題および懸案事項と、それらに対して組織がどのように対応したか	製品開発とモノ創り

項目	指標	WEBページ
5. マネジメント・アプローチに関する開示とパフォーマンス指標		
【経済】		
マネジメント・アプローチ		
	目標とパフォーマンス	(IR資料)
	方針	(IR資料)
パフォーマンス指標		
EC6	主要事業拠点での地元のサプライヤーについての方針、業務慣行および支出の割合	取引先
EC8	商業活動、現物支給、または無料奉仕を通じて主に公共の利益のために提供されるインフラ投資およびサービスの展開図と影響	地域・社会とともに
【環境】		
マネジメント・アプローチ		
	目標とパフォーマンス	2010年の計画と実績

方針		CSR基本方針 地球環境とともに
組織の責任		環境マネジメント
研修及び意識向上		環境マネジメント
監視及びフォローアップ		環境マネジメント
パフォーマンス指標		
EN1	使用原材料の重量または容積	環境マネジメント
EN2	リサイクル由来の使用原材料の割合	資源循環や使用量削減の取り組み
EN3	1次エネルギー源ごとの直接的エネルギー消費量	環境マネジメント
EN4	1次エネルギー源ごとの間接的エネルギー消費量	環境マネジメント
EN8	水源からの総取水量	環境マネジメント
EN11	保護地域内、あるいはそれに隣接した場所および保護地域外で生物多様性の価値が高い地域に所有、賃借、あるいは管理している土地の所在地および面積	生物多様性保存の取り組み
EN12	保護地域および保護地域外で生物多様性の価値が高い地域での生物多様性に対する活動、製品およびサービスの著しい影響の説明	生物多様性保存の取り組み
EN16	重量で表記する、直接および間接的な温室効果ガスの総排出量	CO2排出量削減の取り組み
EN17	重量で表記する、その他の関連する間接的な温室効果ガス排出量	CO2排出量削減の取り組み
EN18	温室効果ガス削減のための取り組みと削減実績	CO2排出量削減の取り組み
EN19	重量で表記する、オゾン層破壊物質の排出量	該当しない
EN20	種類別および重量で表記するNOx、SOxおよびその他の著しい影響を及ぼす排気物質	グループや各工場の環境データ
EN21	水質および放出先ごとの総排水量	グループや各工場の環境データ
EN22	種類および廃棄方法ごとの廃棄物の総重量	グループや各工場の環境データ
EN26	製品およびサービスの環境影響を緩和する率先取組と、影響削減の程度	CO2排出量削減の取り組み
EN27	カテゴリー別の、再生利用される販売製品およびその梱包材の割合	資源循環や使用量削減の取り組み
EN28	環境規制への違反に対する相当な罰金の金額および罰金以外の制裁措置の件数	グループや各工場の環境データ
EN30	種類別の環境保護目的の総支出および投資	環境マネジメント
【労働慣行と公正な労働条件】		
マネジメント・アプローチ		
方針		CSR基本方針
組織の責任		職場の安全衛生
研修及び意識向上		人材育成/キャリア支援 職場の安全衛生
監視及びフォローアップ		職場の安全衛生
パフォーマンス指標		
LA1	雇用の種類、雇用契約および地域別の総労働力	(企業概要)
LA10	従業員のカテゴリー別の、従業員あたり年間平均研修時間	人材育成/キャリア支援
【人権】		
マネジメント・アプローチ		
方針		CSR基本方針
組織の責任		多様性を活かした職場づくり
研修及び意識向上		多様性を活かした職場づくり

監視及びフォローアップ		多様性を活かした職場づくり
【社会】		
マネジメント・アプローチ		
方針		CSR基本方針
組織の責任		(コーポレート・ガバナンス)
研修及び意識向上		リスクマネジメント/コンプライアンス
監視及びフォローアップ		リスクマネジメント/コンプライアンス
パフォーマンス指標		
SO2	不正行為に関するリスクの分析を行った事業単位の割合と総数	リスクマネジメント/コンプライアンス
SO3	組織の不正行為対策の方針および手順に関する研修を受けた従業員の割合	リスクマネジメント/コンプライアンス
SO4	不正行為事例に対して取られた措置	該当しない
【製品責任】		
マネジメント・アプローチ		
方針		CSR基本方針
研修及び意識向上		製品開発とモノ創り お客さま対応/サービス
監視及びフォローアップ		お客さま対応/サービス

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
 お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域・社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
 レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ